

批判的合理主義研究

Studies in Critical Rationalism

2014

Vol. 6, No. 2

日本ポパー哲学研究会事務局機関誌編集部

(2014 年 12 月号)

CONTENTS

<投稿論文>

- | | | |
|---------------------------|-------|---|
| ポパーの批判的二元論について | 金森 洋平 | 1 |
| “イズム” への後退—バートリーの汎批判的合理主義 | 篠崎 研二 | 9 |

<翻訳>

- | | | |
|--------------------------------------|---------------|----|
| 『批判的合理主義：再定式と擁護』、第 6 章 演繹主義における三つの徒労 | D・ミラー著 小河原 誠訳 | 15 |
|--------------------------------------|---------------|----|

<書評>

- | | | |
|---|---------------|----|
| Review of Kei Yoshida, <i>Rationality and Cultural Interpretivism: A Critical Assessment of Failed Solutions</i> . Lexington Books, London, 2014. | Rafe Champion | 34 |
|---|---------------|----|

<その他>

- | | | |
|--------------------------|--|----|
| 日本ポパー哲学研究会 2014 年度会員総会議題 | | 37 |
| 2013 年度会計報告 | | 38 |

<<投稿論文>>

ポパーの批判的二元論について

金森洋平

I はじめに

本稿の執筆動機は R・M・ヘアの次の言葉への反感ないし疑問から始まった。ヘアは言う。

命令は言明と同様に理性的行為者によって問われた問いに答える意図を持っているから、言明と同様に論理法則に支配されるからである。このことは、道徳的判断も論理法則に支配され得ることを意味している。¹

本当にそうなのだろうか。道徳的決定は本来的に自由なものであり、論理法則にさえ支配されないのではないのだろうか。ここでヘアが言っている論理法則というのは「事実から価値は導き出せない」というヒュームが発見した例の事実と価値の二元論である。事実と価値の二元論は正しいと筆者は考える。だが、だからと言って、この二元論からも道徳的決定は自由なのではないだろうか。だが、ヘアを批判すれば、一元論に向う危険性もある。一元論に向わず、かといって二元論にも背反しないという意味での第三の道はないのであろうか。これが本稿での問題である。筆者はポパーの批判的二元論はこの第三の道であると考えている。そこで本稿では、ヘアの二元論及びミルの一元論を検討した上で、ポパーの批判的二元論を提示してみたい。

II ヘアの二元論—事実から価値は導き出せない：論理—

ヘアは道徳的決定を命令と見なし、この命令を

記述に還元しようとするあらゆる試みを否定する。そしてヘアは、言明と命令の間の差異を次のように言う。

言明と命令の間に相違があることを否定するのは困難である。しかし、端的にその相違がどんなものであるかと言う事の方がはるかに難しい。それは単に文法形式の相違ではない。・・・直接法文はあることが事実であることを人に告げるために用いられているが、命令法はそうではない。それは誰かにあることを事実にするように命じるために使われている。²

言明と命令の間にある文法形式の相違とは、端的に言えば、前者が「である」ではのに対して、後者は「べきである」である点に求められる。しかし、ヘアはこれがあくまで形式的な差異に過ぎないとしている。より、実質的な差異とは、前者が事実の告知であり、後者は事実の実現命令であるとしている。ヘア自身が挙げる例で言えば、「扉を閉めろ」という文は明らかに、「将来において扉を閉めること」を実現させるように命令している。これに対して、「君は扉を閉めようとしている」は明らかに、将来において扉が閉められるという事実を告知するものと言える。事実と価値の間にあるこの根本的な相違を基にヘアはあらゆる自然主義的な理論に対して批判を加える。ヘアは自然主義的理論の第一のヴァージョンを次のように言う。

第一の理論が行う還元は、命令法を話者の心についての言明を表すものと考えることによって。「Aは正しい」は「私はAを承認する」を意味しようと主張されたように、「扉を閉め

¹ ヘア『道徳の言語』、21 頁。 傍点は筆者による。
* 以下、『言語』と略記。

² 『言語』、7 頁。

ろ」は「私は君に扉を閉めてもらいたい」を意味すると主張している。³

つまり、命令が話者の心を示す心理学的事実の言明であると第一の自然主義的理論は言うのである。だが、ヘアはこの理論は直ちに困難に陥ると述べている。それはどのような困難なのか。ヘアによると、この理論に従うのならば、話者による「扉を閉めろ」という言明は心理学的事実の表明である。従って、「扉を閉めるな」と同じ話者が言っても矛盾しない。つまり、「扉を閉めてもらいたい」が心理的な意味での本音なのであるが、この本音に逆らう形で命令を発することが可能なのである。しかし、これは論理的矛盾であり、許容されない。もっとも、この第一の理論の支持者は次のように弁明することも可能であるとヘアは論じている。

この理論を支持する者は次のように答えることができる。すなわち、矛盾はしないが願望の不一致がある。しかもこうした不一致は二つの文がどこかで両立しない・・ように感じられることを十分に説明しているという答えである。⁴

つまり、「扉を閉めるな」と「扉を閉めろ」という二つの命令は矛盾していないが、その話者の本音という意味でまさに願望の不一致があるという説明である。分かりにくいので、もう少し詳しく説明しよう。つまり、「扉を閉めろ」の心理学的事実は「扉を閉めてもらいたい」であり、他方、「扉を閉めるな」の心理的事実は「扉を閉めてもらいたくない」であり、両者は心理レベルで不一致であると、この理論は答えるのである。これに対してヘアはこの心理的事実と呼ばれる文も命令であると答える。つまり、ヘアは「扉を閉めてもら

いたい」が、「扉を閉めろ」のずっと控え目な言い方であると論じるのである⁵。これにより、願望の不一致に見られたものは、やはり論理的矛盾ということになる。以上が、自然主義の心理主義的理論とそれに対するヘアの反駁である。しかし、自然主義には心理主義とは異なるヴァージョンもある。それは「扉を閉めろ」は「君は扉をしようとしているか、そうでなければ、X が起こるであろう、のどちらかである」という文に還元される⁶。この場合、X は語りかけられている者にとっては何か悪いものということになる。「君は扉をしようとしているか、そうでなければ、X が起こるであろう、のどちらかである」は命令ではなく、未来に起こる事実の告知であり、その意味において「言明」である。これは自然主義の目的論的理論である。この枠組では「悪い」は「X（目的）に導く」と解釈されると言い得る。これは次のようにも解釈できる。すなわち、「扉を閉めろ」は「君がもし扉を閉めるのならば、Z が起こるであろう」へと還元され、この場合の Z は目的論的に何かに善きものということになる。だが、ヘアこの目的論理論にも問題があるとする。ヘアは言う。

目標とされている目的がそれほど容易には確認できない場合・・、聞き手は「さもなければ」という語の後に何を補ったらよいか途方に暮れることもある。「君の父上に私が電話したと告げてください」というような文が・・・どのように分析されるか理解し難い。もちろん、分析をいつでも「さもかしら何か悪いことが起こるであろう」という文で終わらせることはできる。しかし、こうした方便は一つの指令語を分析の中に再び導入することによってのみ成功する。「悪い」は価値語であり、それゆえ指令的だからである。⁷

³ 『言語』、8 頁。

⁴ 『言語』、8 頁。 傍点は筆者による。

⁵ 『言語』、9 頁。

⁶ 『言語』、10 頁～11 頁。

⁷ 『言語』、10 頁。

命令の中には、「扉を閉めろ」とは異なって、XやZが入りにくいものもある。「君の父上に私が電話したと告げてください」という文はまさにその代表格である。つまり、「君の父上に私が電話したと告げてください」は「君は君の父上に電話するか、さもなければ……」の「……」の部分 が不明確だと言える。従って、全ての命令を言明へと還元することはできないのである。無論、ヘアが指摘している通り、「～さもないと悪いことが起こるであろう」と付け足すことはできる。だが、「悪い」は指令語なのであり、その意味において、命令を言明へと還元しようとする試みは失敗していることになる。つまり、目的論的理論は価値語の分析という厄介な問題を山積させるのみなのである。以上のように命令を言明へと還元しようとする自然主義的試みは反駁される。さらにヘアは命令の本質を理解するために一つの区別を導入する。ヘアは言う。

ある人に何かを命じる過程と、他人に何かをさせる過程は論理的に互いに区別される。これに対応する言明の場合の区別を考えることによって、この区別を解明することができる。他人に何かが事実であると語ることは、彼にそれを信じさせる（あるいはさせようとする）ことから論理的に区別される。⁸

すなわち、命令と説得の区別である。何かを命令することとその命令を受け容れさせるべく説得することとは論理的に別物であるとヘアは論じている。「扉を閉めよ」という命令を発せられても、そのことが直ちにその命令の受容へと帰結しないのであり、その命令の受容には説得という別の手段が用いられることとなる。つまり、「命令」を発したとしても、そのことからその受容へと至ら

ないということである。つまり、命令とは、その受容を問題とはしないとはいえる。ヘアはこのことを明確に述べている。

単に命じるだけでは、彼にこうした行動をさせないようにすることはできないし—それをするように求めてもいない。しかし説得は自分自身に向って（あるいは私たちに）「私は何をしたらよいか」と問うている理性的な行為者としての人間へと向けられているのではない。それはこの問いへの答えでもないし、別の問いへの答えでもない。それはその人に特定の仕方では応答させようとする企てである。⁹

かくてヘアは道徳的判断が論理法則に支配されることを宣言する。もちろん、この宣言は事実言明であり、それを受け容れるかどうかは各人の決定に委ねられる。事実から価値は導き出させないが、それを受け容れるかどうかは各人の判断に任されるのである。だが、ヘアの枠組において二元論はまさに論理的テーゼであることは間違いのない。

Ⅲ ミルの一元論—事実から価値を導き出すことができる：心理—

J・S・ミルは功利主義の枠組において、幸福こそが人々が望むものであり、それ以外は何も望んでいないとする。つまり、功利主義における最大の目的は幸福なのである。ミルの功利主義は、人間のあらゆる行動を心理に還元しようとする。これはヘアが言うところの自然主義の心理主義的理論であるが、より心理学的知見に依っている。この点についてミルは次のように言う。

何かを望むこと（desiring）と何かを楽しく思うこと（finding）、または何かを嫌うこと

⁸ 『言語』、18 頁。

⁹ 『言語』、20 頁。

(aversion) とそれを苦痛に思うこと (thinking)、この二つは全く切り離せない現象であり、むしろこれは同じ現象の二つの部分、厳密に言えば、同じ心理的事実の二つの違った呼び方であると言える。¹⁰

この引用文でミルが言おうとしているのは、「望むこと (desiring)」と「考えること (thinking)」は、二つとも心理の領域にあるということである。そして、ミルはこのことは極めて明白であるとする。つまり心理学的に考えて、個々人はこの二つ—欲求と思考—を区別できないということである。確かに、何かの楽しいあるいは嫌な状況にあるとき、人間はこの二つを区別してはいないだろう。むしろ、欲求と思考を切り離せないと、その時は感じると言える。そして、ミルはこの議論に反論があるとすれば、それは論理的なものであるとする。つまり、論理的に考えて、「意志 (will)」と「欲求 (desire)」は別物であるという反論である。意志は思考の産物であり、その意味において両者は綿密な関係を持っている。この反論は次のように言うだろう。目的が一定している人間は、目的を目論むときに感じる快楽や目的達成時に予想される快楽を完全に無視して目的を成し遂げる、と¹¹。ミルはこの反論に対して再反論する。ミルは、意志は能動的な現象であって、受動的な感受性の状態にある欲求とは本来的に別物であるとする¹²。し

¹⁰ Mill, *Utilitarianism*, p.926. (ミル『功利主義論』、501 頁) *以下、*U*と略記。

¹¹ *U*, p.927. (邦訳、501 頁)

¹² 欲求と意志を区別したからといって、このことは二元論であるということには帰結しない。ミルは両者の心理学的な意味での差異を了承しているのである。もし、この差異を了承しないのならば、ミルの理論は「事実ばかりの世界」ないし「価値ばかりの世界」へと向かうことだろう。だが、そのようなことは非合理である。現にミルは『自由論』の中で事実と価値を区別している。ミルは思想の自由の絶対不可侵性の教育制度への適用として、公的入学制度における試験問題は事実問題に限定すべきと主張している。もっとも、パトナムの一元論はある意味で「価値ばかりの世界」を目論むものと言える。パトナムは「濃い倫理的概念 (thick ethical

cashしながら、意志の出自については次のように言う。

もともと〔意志は〕欲望から枝が分かれたものであるが、やがて根を生やし、親株から別れてしまうこともある。だから、習慣的な目的の場合、しばしば我々は欲するから意志するのではなくて、意志するから欲してしまう。けれどもこれは、習慣の力という周知の事実の一例に過ぎず、決して有徳な行為の場合に限らない。¹³

ミルは欲求と意志を区別しているが、意志それ自体は本来的に欲求に属していたとする。すなわち、意志の出自は欲求なのであり、それが欲求から分岐し、欲求とは異なる一つ概念となるのである。さらに上記引用文において、ミルは意志が欲求に先んずる可能性を認めているが、それは習慣 (habit) の力に過ぎないとしている。この習慣の力というものは、ミルの枠組においては侮れないものである。ミルは「意識的な決意ではじめても、その決意が習慣化しており、おそらく慎重に考慮した選択に反して習慣の力で動かされていることもある」¹⁴とも述べている。意志は欲求の子であり、生みの親の支配を受けなくなったときに、

concepts)」の存在を主張し、「残酷な (cruel)」に代表される評価語は事実と価値の区別をなくしていると主張する。つまり、「彼は残酷な教師である」という言明における「残酷な」は当該教師を「記述」するだけではなく、「評価」しており、その意味において事実と価値の二元論は崩壊していると主張するからである。もっとも、パトナムの議論は「事実ばかりの世界」でも「価値ばかりの世界」でもない「第三カテゴリー」があるとする主張であるが、それでも二元論の見地からは「価値ばかりの世界」を目論んでいることは確かである。もっとも、パトナムが依拠しているのは心理学ではなくて論理学であるが……。以下を参照のこと。

Mill, *On Liberty*, p.178 (ミル『自由論』、214 頁)

Putnum, *The Collapse of the Fact/ Value Dichotomy*, pp.34-35. (『事実／価値二分法の崩壊』、40 頁。)

¹³ *U*, p.927. (邦訳、502 頁)

¹⁴ *U*, p.927. (邦訳、502 頁)

今度は習慣の支配を受ける¹⁵。このように意志は非常に弱いものであり、これに対して欲求は極めて強いものである。さて、以上のミルの議論を事実と価値の関係に当てはまると次のようになる。何かを決定するというのは、欲求がその根源にある。つまり、道徳的決定は心理へと還元されることとなる。もちろん、欲求とは異なる決定を下すこともある。だが、それは習慣という一種の社会科学的事実の影響を受けているのであり、ここにおいても決定は事実へと還元されることとなる。社会学的事実にせよ、心理学的事実にせよ、ミルの枠組では価値は事実へと還元されるのであり、ここにおいて事実から価値が導き出されるというテーゼが確立するのである。無論、ミルの場合は心理学的事実への還元を重視しているのであり、その意味において事実から価値は導き出すことができるというテーゼは心理学的テーゼということになる。

IV ポパーの批判的二元論—事実に対して価値を付与すべきである：倫理—

ヘアとミルに通じている点は、事実と価値の関係を事実として示している点である。もちろん、ヘアならばこの事実を受け容れるかどうかは各人に委ねられるとするだろう。ある事実を告知したからと言って、その告知はその事実の受け容れの説得までは含まない。しかしながら、事実の力は強力である。ヘアの場合は論理学的事実、ミルの場合は心理学的事実ということになり、それはまさに科学法則と考えることができる。ある事柄が科学的に可能であるにせよ、不可能であるにせよ、それを科学法則の形で提示するのならば、それを受け容れないという決定は合理的とは言えないこととなる。従って、事実と価値の関係を事実言明の形で提示することは一いかにその提示に説得が

含まれないとしても—それを受け容れないという決定は批判される余地がある。そして、その結果として自由な決定の範囲は委縮する。では、どうすればよいか。ここで参照したいのが、ポパーの批判的二元論（critical dualism）である。

ポパーの批判的二元論は『開かれた社会とその敵』の第5章及び第25章で明確に提示される。第5章での主たる議論は、ヘア的な意味において、論理学的事実を提示したものと見えよう。道徳的決定には責任（responsibility）が付きまとうという事柄も事実的な議論と言える。無論、ポパーの意図は道徳的決定に恣意が付きまとう議論に対する反論なのであるが、ポパーの議論は事実的と言える。ポパーが情熱的に語る次の発言もあくまで事実的である。ポパーは言う。

我々はこの責任を回避することはできない。
我々がどのような権威を受け容れようと、それを受け容れるのは我々なのである。¹⁶

「できない（cannot）」はまさに事実に対する言明である。道徳的責任は存在するのであり、この存在事実をポパーは提示していると言える。だが、ポパーは第25章ではこの事実を参照した上で、この事実に対して価値を付与する決定を勧める。このポパーの議論を見てみよう。ポパーは言う。

自然的事実であれ、歴史的事実であれ、諸多の事実は我々のために決定を下すことはできない。それらは我々が選択しようとしている諸目的を決定することはできないのである。自然と歴史に目的と意味を導入するのは我々である。¹⁷

¹⁵ U, p.928. (邦訳、503 頁)

¹⁶ *The Open Society and Its Enemies*, volume1, p.73. (『開かれた社会とその敵』、第一部、85 頁) *以下、OSと略記。

¹⁷ OS, volume2, p.278. (邦訳、第二部、258 頁) 傍点は筆者による。

自然的事実も歴史的事実も何らかの命令を発することはできない。これは論理的な事実である。しかし、その事実に対して価値を付与する決定は禁止されない。ポパーが挙げる例で言えば、人間が不平等であるという事実にしても、その事実が何らかの命令を発することはできない。むしろ、その事実を踏まえた上で、その事実に反する決定を下すことは可能と言い得る。すなわち、人間を平等に取り扱うべきであるという決定の余地は残されているのである。さらにポパーは一つの歴史的事実（権力政治史）も一つの解釈に過ぎないのであり、それとは異なる解釈の余地もあるとしている。つまり、ポパーは事実に対する価値付与の重要性を説いているのである。別の言い方をすれば、価値付与の要請と言える。ポパーの次の言葉はそのことを明確に示している。

予言者的な姿勢を取る代わりに、我々は自らの運命の製作者とならねばならない。・・・このように我々は我々の側から歴史を正当化できよう。歴史はそのような正当化を緊急に必要としている。¹⁸

以上の価値付与要請は、ポパーの自然科学論（『科学的発見の論理』）の中にも見受けられる。ポパーは言う。

経験科学はその方法によって：科学的体系を取り扱う我々のマナー；その処理の仕方によって特徴付けられるべきである、と私が提案する理由はここにある。従って、私は研究または発見に携わる場合に科学者が則るべきルール、あるいはそう言いたければ規範を確定しようと思うのである。¹⁹

批判的二元論に則れば、規範は個人的決定に

¹⁸ OS, volume2, p.280. (邦訳、第二部、259 頁)

¹⁹ ポパー『科学的発見の論理』、上、60 頁～61 頁。傍点は筆者による。

過ぎず、まさに提案に過ぎない。とすれば、上記引用文でポパーが確定しようとするところの規範もポパー個人の提案ということになるはずである。世界の記述たる科学理論と異なり、科学方法論は科学者に対して示された規範と言える。この規範としての科学方法論は、科学者が自ら発見した科学理論をどのように取り扱うべきかを指示するのである。もちろん、ポパーは反証主義を自然科学者が則るべき唯一の科学方法論としているのであるが、批判的二元論の観点から言えば、これはポパー個人の提案に過ぎない。ポパーの自然科学論においては反証主義の採用が要請されるが、これはあくまでポパー個人の見解に過ぎないのである。科学者は自らが発見した科学理論を取り扱うに相応しい科学方法論を選択すればよいだけの話であり、その意味においては反証主義の採用は絶対的ではない。批判的二元論は事実と価値を峻別し、個々人の選択・決定を重視する。科学における決定とは、まさに科学者が採用する科学方法論を指す。そして、科学者はこの科学方法論の選択に知的責任を負うのである。この思考枠組はまさに、批判的二元論そのものと言えよう。この点について、ポパーの社会科学論（『歴史法則主義の貧困』）との関連で、もう少し考えてみよう。ポパーが重視する社会科学方法論は「ゼロ方法（zero method）」である。ポパーのゼロ方法は社会科学において諸個人が十分な合理性と十分な情報を持つと仮定して、その仮定の上に人間行動の理想的モデル（グラフ上のゼロ座標）を構築し、そのモデルから研究対象としての人間行動がどれほど偏差しているかを分析するという方法論である。これはいわゆる「意図せざる帰結」とも密接に関わっている。ポパーは次のような事例を出している。

ある男が家を購入したいと切実に望んでいるとしよう。このとき我々は確信をもって、この男は家の市場価格を高くしたくないと望んでいると、仮定できる。しかし、彼が購入者として

現れるという事実はまさしく市場価格を吊り上げる傾向を持つであろう。²⁰

これは極端な例と言えるだろうが、ゼロ方法を簡単に理解するための助けとなる。まず、この事例のゼロ座標は何であろうか。家の購買希望者は十分な情報—家の購入に関する情報—と合理性—家の購入に必要な経済的余裕—を持っている。その上で彼は市場価格を釣り上げたくないと考えている点（これは合理的である）は、こう考えることは至極、妥当である。しかしながら、彼の行動は結果として家の販売価格を上昇させるという意図せざる帰結をもたらした。とすれば、この場合のゼロ座標—市場価格を上昇させたくないという仮定の下で構築される人間行動の理想的モデル—は何であろうか。それは、家を購入しないこと、これである。不作為の行動であるが、これが最も理想的であると言い得る。なぜならば、家を購入しないことによって、彼は自分が知っている以外の高い物件を買わされることになりかねないからである。もう少し、複雑なケースをもう一件挙げてみよう。ポパーは言う。

登山と孤独への愛好は心理学的に説明がつくと主張する者もあろうが、もし多数の人々が登山を好めばそれらの人々は孤独を楽しむことができなくなる、という事実は心理学的事実ではない。しかも、この種の問題がまさに社会理論の根底に横たわっているのである。²¹

この場合の登山は、登山それ自体を愛するというよりも、登山にまつわる孤独を愛する行為と言い得る。登山者は社会から隔絶された秘境を愛する。しかし、多数の登山者が登場することになれば、孤独的な意味における登山はその価値を失う。

²⁰ OS, volume2, p.96. (邦訳、第二部、94 頁) 傍点は筆者による。

²¹ Popper, *The Poverty of Historicism*, p.158. (ポパー『歴史主義の貧困』、237 頁) *以下、PHと略記。

この場合のゼロ座標へと至る仮定に基づく理想的モデルは、人間が合理的で十分な情報を持つのであれば、登山をしないということである。現代社会においては秘境といえども、インターネットによって瞬く間に紹介されてしまう。むしろ、読書をした方が、孤独を楽しむことができる。とすれば、大多数の人間が登山を好むという事実は孤独を愛する登山者にとって意図せざる帰結であり、登山をするという行為それ自体がゼロ座標から偏差しているのである。ゼロ座標からの偏差がまさに意図せざる帰結をもたらす。

社会生活は対立する集団間の単なる力試しではなく、多かれ少なかれ制度や伝統といった弾力的なあるいは脆いフレームワーク内部での行為であり……このフレームワークの中では予見できなかった、そしてその幾つかは予見不可能であるような多数の反応を生み出すのである。²²

制度(法)や伝統という名のフレームワークは、まさにゼロ座標それ自体である。我々はゼロ座標の中で生きている。法は合理的な人間を想定して処罰や賠償責任を命じる。例えば、刑法を考えてみよう。刑法は十分な情報と合理性を持つ人間ならば、刑事責任を問われることは割に合わないと考えずして、死刑を上限として数々の処罰規定を設けている。しかしながら、現実には犯罪は発生している。十分な情報(刑法規定の完全な認識)と合理的思考(処罰されたくないという考え)を持つのであれば、予見不可能な反応たる意図せざる帰結としての犯罪は発生しない。すなわち、人間行動はそれほど合理的ではなく、かつ十分な情報も持っていないのである。ゼロ方法はその社会科学的事実に対して示された規範としての社会科学方法論と言える。ありていに言えば、ゼロ方法は

²² OS, volume2, p.95. (邦訳、第二部、93 頁)

人間の社会科学的事実ないし理論（人間は合理的ではなく十分な情報も持っていない）に対して、ゼロ座標からの乖離を測定するべしと方法論的に要請しているのである²³。もっとも、ポパーはこのゼロ方法の採用については各人に委ねられる旨を宣言している。ポパーは言う。

社会科学においては・・・「ゼロ方法」と呼んでいいようなものを採用し得る可能性があるということなのだ。²⁴

要するに、ポパーは規範としての科学方法論の採用は各科学者に委ねられるのであり、ゼロ方法といえども絶対的ではないとしているのである。従って、ゼロ方法とは異なる社会科学方法論の採用の余地も十分にあり得る。だが、ポパー自身はゼロ方法の採用を要請している。さて、事実と価値の問題に戻ろう。事実から価値を導出することは不可能であり、これは科学的事実である。その上でポパーはその事実に対する価値の付与の重要

²³ ゼロ方法は方法一元論に基づいて自然科学方法論である反証主義を社会科学方法論として応用したものと解釈できる。自然科学上の反証主義は仮説（科学的事実）をテストし、そのテストに耐えた理論を暫定的に採用しているであるが、ゼロ方法はゼロ座標たる人間行動の理想的モデルを一種の仮説とし、反証・批判に耐えたモデルを採用する。だが、社会科学においては理想的モデルが採用されることは稀である（*）。むしろ、ポパーは社会科学において反証された仮説モデルの分析（そこには一抹の真理がある）を主張したのではないだろうか。ここに自然科学と社会科学の具体的な分析上の差異がある。いや、差異というよりも、ポパーの自然科学論と社会科学論の差異はメタレベルと対象レベルの差異ではないだろうか。対象が違うのだから、方法一元論それ自体はゆるぎない。以下を参照のこと。

PH, pp.134-136.

（*）ゼロ座標でさえ変わり得るが、本文で述べたように我々は制度や伝統というゼロ座標の中で生きている。制度や伝統が簡単に反証されたということは聞いたことがない。刑法上の姦通罪規定のように制度内容が変わることがあるが、制度の存在それ体が変わることはない。それはアナーキーであるし、開かれた社会の理念に背反する。

²⁴ PH, p.141.（邦訳、212頁） 傍点は筆者による。

性を説く。すなわち、ポパーの批判的二元論は事実に対して価値を付与すべきであると要請しているのである。だが、これは要請であり、事実ではない。従って、この要請を拒否することも可能である。事実とは異なり、この拒否は簡単と言える。拒否したとしても批判されることはないだろうし、この拒否自体が尊重されるべき自由な決定である。このように批判的二元論は規範であり、それ自体としては論理法則ではない。だが、この方が自由な決定の余地がある。ミルの一元論にしろ、ヘアの二元論にしろ、それは規範ではなく、一種の科学理論（倫理学理論）と言える。この科学理論をどのように取り扱うべきかという広い意味での科学方法論（倫理学方法論）こそが批判的二元論と言えるのであり、この採用はあくまで個々人の決定に任される。つまり、批判的二元論は論理でも心理でもない第三の可能性としての倫理なのである。

<参考文献>

Mill, John Stuart, *On Liberty*, Penguin Books, 1859.（ミル『自由論』、塩尻公明・木村健康訳、岩波文庫、1971年）

Mill, John Stuart. *Utilitarianism*, in *The English Philosophers from Bacon to Mill* the Modern Library, 1939.（ミル『功利主義論』、伊原吉之助 訳、中央公論社『世界の名著 ベンサム、J・S・ミル』に所収、1979年）

Popper, Karl R. *The Open Society and Its Enemies*, volume1 & volume2, fifth edition, Routledge London, 1966 (first published in 1945).（ポパー『開かれた社会とその敵』、第一部・第二部、小河原誠・内田詔夫訳、未来社、1980年）

Popper, Karl R. *The Poverty of Historicism*, second edition, Rutledge and Kegan Paul, 1960.

（ポパー『歴史主義の貧困』、久野収・市井三郎訳、中央公論社、1961年）

年)

下、大内義一・森博訳、恒星社厚生閣、1971年

健訳、勁草書房、1982 年。

[illegible]

判的合理主義

篠崎 研二

ホパーの合理主義

義について次のように述べた。(下線は筆者)

な態度、すなわち、感情や情熱に訴える代わりに、むしろ理性、つまり明瞭な思考と経験に拠ることで可能な限り多数の問題を解決しようとする態度を示すために用いている。（『開かれた社会とその敵』 207 頁）

いった手段を通じて人々は多数の重要な問題についてある種の同意に達しうるのでという希望であり、人々の要求や利害が衝突する所でさえ、様々な要求や提案の議論が可能であり、そして—おそらくは仲裁によって—公平であるために、万人にとってではないにせよ、大部分の人にとって受け入れることのできる妥協に達することがしばしば可能であるという希望である。(同 208 頁)

特徴を持つものとして理解したいと思う。ひとつは、合理主義とは問題の解決に当たっての態度であり、合理的な論証や観察というのは、そのための手段、方法だということである。もうひとつは、合理主義が開かれた社会を作るという問題との関

わりにおいて導入されていることである。だから、ポパーは明言してはいないが、問題をなんら構成しない領域であれば、そこでどんな考えや信念を人が抱いていても、その人が合理主義者であるか否かということには関係がないということになると私は思う。つまり神を信じていようが、どんな縁起かつぎをしていようが、その人の内面の思想には関知しない。共通の問題の解決に当たり、合理的態度をとるのであれば、その人は合理主義者なのである。もちろんこれは私の期待をこめたポパー解釈ではある。

しかし上記引用箇所のとで、ポパーは「無批判的合理主義」または「包括的合理主義」という概念を導入する。これは

(P2) 論証あるいは経験という手段によって弁護されえないような考えや仮定を受け入れる用意はない(同、212 頁)

という態度である。そしてこの P2 自身が論証によっても経験によっても支持されえないのだから、無批判的合理主義は論理的に支持できないと批判する。さらに先に述べた合理主義的態度についても同様の矛盾を孕んでいるとする。

験を重視する点にある。だが、論理実証も経験も合理主義的態度を確立することはできない。なぜなら論証とか経験によって深い印象を与えられるのは、おそらく論証とか経験を重視しようとしているもの、従ってすでに合理主義的態度を受け

入れている者のみであるからである（同、212 頁）

そして、合理主義的態度を採用するのは「非合理的理性信仰」だと結論するに至る。

しかし私にはこれは全く奇妙な結論に見える。(P1)では合理主義または合理主義的態度というものは、問題解決にあたって採用すべき「手段や方法」だと言っていたのである。「手段や方法」自身から、その手段や方法を選択すべきである、などという命題が導出できないことなどあたりまえである。ある人がある問題の解決にあたって、「それには物理学のある法則を適用すべきだ」と主張したとする。しかしその主張自体は物理学から導出することはできない。するとこの人は「非物理学的な物理学信仰」をしていることになるのだろうか？あるいは箱根に行くのに車で行くか電車で行くか迷った末、電車で行くことにしたとする。すると電車の概念から「箱根へは電車で行け」という判断は導出できないから、この人は「非電車主義的な電車信仰」にでも陥っているのだろうか？

この物理学や電車と、合理主義との違いはどこから生じたのだろうか？それは「主義」、つまり rationalism の “ism”（イズム）という言葉の響きによるのである。マルクシズム、プロテスタンチズム、カトリシズムといった代表的なイズムの特徴は何だろうか？それは手段や方法などでは断じて無く、それを奉じる人々の全生活を支配する原理だということである。人々の行動やさらには生活全般のあり方が、その原理から導出されなければならないのである。つまり、

(I) ××イズムを奉じる者は自らの行為すべてを××イズムから導出できなければならない

というイズムの前提が隠れているのだ。そしてこの“××”が何であろうと (I) 自身を「××イズム」から導出することはできないという「自己矛盾」が「合理主義の自己矛盾」なるもののルー

ツなのだと私は思う。イズムとは手段や方法として「採用する」ものではなく、それに全存在をもって「帰依する」ものなのだ。(P1)でポパーは合理主義をこのイズムの軛から解放し、開かれた社会を形成するために、多くの人々が採用できる「方法」として定式化したはずだ。しかし「包括的合理主義」の議論のあたりから、イズムとしての合理主義に舞い戻ってしまい、そのあげく「非合理的理性信仰」などという全く余計なことを言ってしまったのである。

しかしこの余計な言葉に過敏に反応し、そこに合理主義への脅威を感じて、その正当化に腐心する思想がある。パートリーの「汎批判的合理主義」である。この思想を巡る議論は、この思想自体が矛盾をはらんでいないかという、テクニカルなことばかりに集中しすぎていたと思う。しかし私は、この思想の最大の問題は、ポパーの貢献を逆戻りさせ、合理主義を再び狭隘なイズムへと後退させたところにあると思っている。

「汎批判的合理主義」への論理

まずパートリーの議論をざっと振り返ろう。

「合理性の限界」論：どんな主張でも、その根拠や理由を無限に問い続けることができる。だからその主張を正当化するにはどこかで問いを中止し、ある不可侵の原則や前提をドグマとして設定するしかない。人々はそれぞれ異なるドグマを持ち、それは非合理的なコミットメントによるのだから、根拠が無いのはお互いさまで、「お前も同罪だ」(Tu Quoque) 論法によって、互いの合理的批判ができなくなり、相対主義が生まれる。

「汎合理主義」の自己矛盾：合理的な主張しか受け入れない、とする態度は自己言及すると矛盾を招くから、汎合理主義（包括的合理主義）は論理的に存在し得ない。

批判的合理主義：批判的合理主義は、合理主義の矛盾の存在を認め、その採用をドグマとして受け入れる。しかしそうするとこの思想も「おまえ

も同罪だ」論法を免れず、相対主義を導かざるをえない。

汎批判的合理主義：すべては批判に開かれているとして、いかなるコミットメントもしない。そのため「お前も同罪だ」論は通用しなくなり、相対主義を克服できる。

「パートリー論理学」の怪しさ

以上のパートリーの議論は間違いだらけだと私は思う。

①「合理性の限界」論の無理

合理性あるいは合理的であるということによって、議論の前提が絶対に正しいことなど必要としない。そんなことが必要だったら、科学上の論争だって合理性のないものになってしまうだろう。それは前提の上に立つ議論の進め方に関わるものである。お互いが異なる非合理的なコミットメントをしている、つまり疑い得ないものとして異なる前提を置いているとしても、そうした前提の上に積み重ねている議論が、自己矛盾しているとか、論理的に誤っているとか、事実と異なる前提をさらに置いている、といった批判はいくらでもできるはずである。立証し得ない前提をどこかで置かざるを得ないということは、「合理性の限界」などではなく、「正当化の限界」にほかならない。

②合理主義の自己矛盾について

パートリーは「汎合理主義 (panrationalism)」(ポパーが「包括的合理主義」と呼んだもの) が以下の二つの要請からなるとする。

(B1) 合理的な議論によって正当化あるいは確立された見解は全て受け入れる

(B2) 合理的な議論によって正当化あるいは確立された見解だけを受け入れる

そしてパートリーはこの二つの立場を取ることとは論理的に不可能だと次のように論じる。(訳は多

少簡略化した。下線は後の議論のために私が付けたものである。)

汎合理主義を達成できないことはいろいろなやり方で示すことができる。私は、二つの要請を同時に保持することはできないという議論から始めよう。二番目の要請を本気で受けとめれば、一番目の要請を正当化しようとしなければならない①。しかしこれは実行不能である。第一に、一番目の要請はいかなる手段によっても正当化できない。第二に、論証の結果は受け入れるという行為を正当化するものはどんなものでも、正当化されたものは承認すべきであるということが受け入れられていなければ意味をなさない。しかしこれこそが当の問題なのだ②。(*The Retreat to Commitment*, p.93)

まずこの最初の下線部①が私には理解しがたい。 Ry を「 y は合理的な議論によって正当化あるいは確立されている」、 Axy を「 x は y を受け入れる」を表すとしよう。 x の値域は「合理主義者」とする。すると(B1)、(B2)はそれぞれ以下の(a)、(b)という論理式になると私は思う。

$$(a) \forall x \forall y (Ry \rightarrow Axy)$$

$$(b) \forall x \forall y (Axy \rightarrow Ry)$$

(a)と(b)は逆の関係にある。だから「(b)が成り立つためには(a)が成り立たなければならない」などということはない、というのが論理学の初歩である。言葉で言えば、(b)は「合理的な議論によって正当化あるいは確立された見解」はみんな受け入れなければならない、ということは言っていない。受け入れないものがあっても良いのである。ということは、パートリーが(B2)で考えていたことは、

$$(b') \forall x \forall y (Axy \leftrightarrow Ry)$$

ということなのだろうか？しかし続けてパートリーはこう論じる。

もし二番目の要請が正当化できないのならば、つまるところ二つの要請に同時に従っていることはできない。二番目の要請は、正当化できないいかなる考えを抱くことを禁じているからである。二つの要請のうちのどちらかを選択しなければならないとなると、問題はどちらを捨てるかということになる。(同、p.94)

もしパートリーが(B2)で (b') を言っているのだとすると、こんな問題は生じない。 (b') だけが問題なのであり、二つの要請のうちからの選択など問題になりはしない。すると(B1)、(B2)はやはり (a) 、 (b) に対応するのだ、と考えるほかはないようである。すると下線部①は間違いである。

パートリーの議論はさらに以下のように続く。

さて、一番目ではなく二番目の要請を棄却した方が良いとするもっともな理由がいくつかある。我々は適切な合理主義のあり方を探しているのであるから、合理的に正当化された見解は何であれ受入れるべきだとの要請を捨て去ることはまず無理だからである③。そのうえ、二番目の要請は自己矛盾していることを論証できる。その要請自体が正当化できないから自己矛盾している。したがって、それが真であるならば、その要請自身によって、自身を棄却しなければならない。二番目の要請はそれ自身が支持し得ないことを断言するのである。

かくして、以上の議論に問題なければ、二番目の要請は論理的に不可能であり、合理的であるとは認められない。そして二番目の要請は、合理主義のあり方についての汎合理主義の理論が持つ包括的な性質の根拠となっているのだから、汎合理主義者というのは、たまたま存在しないのではなく、論理的に存在し得ないのだ ④(同、p.96)

というわけで、二番目の要請を自己言及すれば矛盾をきたすから、汎合理主義は成り立たないといっているようである。論理式で考えてみよう。 (b) に自己言及する、すなわち y に b を入れると

$$(c) \forall x (Axb \rightarrow Rb)$$

となる。合理主義者は b を受入れているのだから、 Axb は真、したがって Rb は真でなければならないが、これは保証できることではないから、確かに矛盾をきたす。しかし下線部③の言い方からすれば、二番目の要請を捨て、一番目を採用する道もあるはずだが、これについての言及はなぜか無い。このことは、一番目の要請が自己言及による矛盾を生じないという事情を考慮するといっそう奇妙に思えるのである。 (a) の自己言及をしてみよう。すなわち、

$$(d) \forall x (Ra \rightarrow Axa)$$

この (d) が成立するためには Ra が真である必要はない、というか偽であればこれは成立する。従って自己言及による矛盾はの場合生じない。つまり (a) 自身は合理的に正当化されていなくても、それを受け入れることは (a) に矛盾しないということである。

実はパートリーがどういう理由で汎合理主義は論理的に成立たないと言っているのか、私にはよくわからないのである。一番目の要請も二番目も合理的な正当化はできないのだから、それらを受入れることはどちらの場合でもコミットメントである。だから成立しないのか？それとも二番目の要請のように自己言及すると矛盾を起こすからなのか？前者であれば最初にそう言えばいいのであって、引用箇所のような議論は全く不要だろう。引用箇所の特に下線部④などの議論からすると、自己矛盾がその理由であるように思えるが、そう

だとしたらなぜ一番目の要請を合理主義の原理とする選択肢に言及しないのか？私は自己言及による矛盾などどうでも良いと思っているが、どうしてもそれが嫌だというのであれば(a)を、したがって一番目の要請に従うことを合理主義の条件にすれば良いと思う。だいたい、合理主義者でも「この詩は感動的だ」とか「この音楽はとても美しい」などという、合理的に論証できない命題を受入れるのだから、二番目の要請はそもそも非現実的なのである。

③「汎批判的合理主義者」とは何をする人か？

批判的合理主義と汎批判的合理主義とはどこが異なるのか？「非合理的理性信仰」をしないという点だけである。パートリーはこの「信仰」を捨てれば合理性を回復できると考えたわけだ。そこで、

(B3) 批判することができ、また批判に開かれており、厳格な吟味に耐えた見解（立場）であれば、正当化されていないとしても、それを保持することは合理的である（同、p.119）

と汎批判的合理主義を定式化し、この定式化自身も批判に開かれているとした。しかしこれは問題の解決にまったくっていない。ここで「汎批判的合理主義者」とは一体どういう人なのか、考えてみよう。それは(B3)を受け入れる人々だろう。「いやそれも批判に開かれているから、受け入れるわけではないのだ」などと言われたら、何をすれば人かさっぱりわからない。するともう矛盾が生じるのは明らかである。ただちに「(B3)自身は批判に開かれており、厳格な吟味に耐えたのか？」という問いが生じ、そんなことは言えない、となるからである。つまり(B3)を受け入れるということはコミットメントであり、だから汎合理主義や批判的合理主義から何の進歩もしていないのである。

念のため、汎合理主義などのときと同様に考えてみよう。 Cy を「 y は批判に開かれており厳格な吟味に耐えた」、 Hxy を「 x が y を保持するのは合理的である」、 x の値域は「汎批判的合理主義者」であるとしよう。すると、包括的合理主義のときと同様に、

(e) $\forall x \forall y (Cy \rightarrow Hxy)$ （批判に開かれていて厳格な吟味に耐えた立場であればすべてそれを保持するのは合理的である）

(f) $\forall x \forall y (Hxy \rightarrow Cy)$ （保持していることが合理的な立場は、批判に開かれていて厳格な吟味に耐えたものだけである）

という論理式が得られる。そして(f)は自己言及するとやはり矛盾をきたす。 Cf が真だとは言えないからである。もちろん(f)は汎批判的合理主義者の立場ではない、として別のやり方で矛盾を回避することはできるかもしれない。しかしそのやり方は汎批判的合理主義だからこそできる、というものでなければならない。（だから(e)を選択するとか、自己言及を禁じるなどというのは駄目である。）パートリーはそれを示していない。私にはそれができるとは思えない。そもそも(b)や(f)はCやRが多少とも内実のある述語であれば、この形式だけで自己矛盾を起こさざるを得ないのである。（自己矛盾を生じないのは、 Cy が「 y は論理記号 $\forall$ を含んでいる」とか「12個の記号からなる論理式である」などを意味する場合ぐらいのものではないか。）

ポパーが「非合理的理性信仰」と言わざるを得なかったのはこの自己矛盾のためであり、これを解消することなしに、ただ「非合理的コミットメントはしない」などと宣言しても、何の解決にもならないことは明らかではないか。ところが不思議なことに、パートリーの汎批判的合理主義をめぐる議論は、「すべては批判に開かれている」という命題自身が自己矛盾を含んでいないか、という

点に集中しているようである。私は「批判に開かれている」という述語の意味があまりはっきりしないのに、こういう議論をしても仕方ないと思うが、バートリーは、Post が指摘した「自己矛盾」について言及（同、p.224）して、矛盾を回避する方法として、タルスキ真理論のようなメタ言語や、ラッセルのタイプ理論などを使って自己言及を禁じればよいと述べている。しかしこれは驚くべき主張である。ついさっき述べたように、それが許されるのなら、包括的合理主義のパラドクスなど初めから生じない。つまりバートリーの言う合理主義のディレンマなど初めからなかったことになるのだ。実に自滅的な議論である。

おわりに

ギャンブラーのファラシーというのがある。コイン投げの賭博をやっている、表が 20 回続けて出たら、21 回目には裏の出る確率が表よりも大きくなるだろうと思うことである。このファラシーに囚われたギャンブラーをしかし私たちは笑うことはできない。ギャンブラーは非合理であろうと欲したのではない。合理的に行動しているつもりなのである。私たちも同じ穴のムジナで、決して不合理を欲しているわけではなく、合理的に行動しているつもりが、実は不合理を重ねているに違いないのである。そして私はこのような、知らないうちに犯している不合理な行為を少しでも減らしていきたいのである。しかし難しいのはまさにそのことなのである。その困難さを、バートリーは彼の議論の甚だしい不合理ぶりによって自ら体現してくれている。

私が「汎批判的合理主義」などに全く興味を感じないのは、それが自らの不合理を改めることに何の効果もないからである。バートリーの基本的な発想は合理主義をイズムとして正当化することであり、それは結局、自分は正しい思想を抱いている、という自己満足をもたらす以外になんの貢献もしない。このような精神のあり方こそ、

正当化主義と呼ぶべきだろう。私はポパーの(P1)を選びたい。



D. ミラー 著

小河原 誠 訳

『批判的合理主義：再定式と擁護』¹

第6章 演繹主義における三つの徒労

6.1. 演繹主義

演繹主義とは、わたくしがここで理解したいと思っているかぎりでは、帰納論理は存在せず、科学においていままでになされたあらゆる推論は演繹的推論であると主張する学説のことである。ヒュームに対する応答は、前章で叙述しておいたところだが、そのいくつかは演繹主義の立場である、といつてよい。一例をあげてみよう。わたくしが〔第5章で〕*a*. 実証主義と呼んでおいたものは、演繹主義の立場にたっている。というのも、それは、科学の内容は観察や知覚報告またそこから演繹される帰結で尽きる、と見ているからである。これとは反対に、仮説・演繹主義と呼ばれている科学にかんする理論の大部分は、厳密に言えば、演繹主義の立場にはたっていない。というのも、それらは、仮説設定や演繹的テストという真に科学的な活動のうえにある種の帰納的確証（confirmation）という過程をおいているからである。したがって〔この理論においては〕——ある神秘的な仕方、と言わざるをえないと思うのだが——もっともよくテストされた仮説が、経験との取っ組み合い〔経験との接点〕という終端において、経験とのかかわり（empirical engagement）によってもっともよく確証された、威厳をもった、

称賛されたものとして出現すると考えられているからである。この点で、わたくしは、反証主義が〔ときとして〕仮説・演繹主義と呼ばれるにもかかわらず、仮説・演繹主義一家のそろいの服を着てパレードに参加させられるのを見たいと思ったことは決してなかった。仮説・演繹主義と呼ぶのだったら、つぎの事実を強調するためにそう呼ぶのがよい。つまり、帰結を引き出そうとする努力の（心理的とは対照的に）論理的な目的はいつでも批判にあるという事実、言い換えると、既知のことからその帰結を引き出すのは自分たちの知識を拡大したり強化するためではなく、〔それを反証によって〕清算するためであるという事実、こうした事実を強調するためだということである。反証主義は、仮説・演繹主義に対して正当化主義の立場からなされる標準的な批判に煩わされることはない。演繹主義に対して絶えずなされる反論に、現存する科学理論はあらゆる点にいい加減な目的がぶら下っているふうには厳密さを欠いた雑然としたもの〔言明群〕であって、形式論理学のきっちり公理化された演繹体系からは程遠いというものがあるが、わたくしはこの反論からも同じように感銘を受けることはない。まさにその通りなのだ。しかし、理論が初めにはどれほどだらしなく見えようとも、いつでもそれを演繹的に探求することは可能である。つまり、理論の帰結がどんなものであねばならないか、またその前提がどんなものではありえないかを決定するための試みはできるということだ。そしてそうした試みは——われわれに運があるならば、ということになるが——少しずつの改善をもたらし、演繹的構造に似たものをしだいしだいに出現させることになるだろう。だから、演繹主義とは、わたくしにわかるかぎりでは、科学の方法の一条項であり、理論の改良や修正事にかかわるものなのだ。言い換えると、それは、理論の定式化にかんするテーゼではなく、理論が攻撃されるべき仕方に

¹ David Miller, *Critical Rationalism: A Restatement and Defence*, Open Court, 1994, Chapter 6: Three Lost Labours of Deductivism. All right reserved by David Miller.

翻訳権：小河原 誠。参考文献については原本の文献一覧を見られたい。

かんするテーゼなのである。

前章ではヒュームに対して演繹主義の立場からなされた三つの応答を要約しつつ欠陥を責めておいた。本章では、それら三つの応答、つまり、*i.* 可能主義（ワトキンズ）、*j.* 化粧した合理主義（マスグレーブ）、*k.* ニヒリズム（個人的ベイズ主義）、をより深く——そしておそらくはより同情的に——見ていきたいと思う。これら三つの立場はすべてそれら三つの仕方で帰納的推理を引き合いに出すことに猛反対して、純粋な演繹主義の採用に努めている。それは称賛に値するのであり、拍手をおくりたい。しかし、1.3 で見たように、それらは、帰納推理という見てくれだけのそして妥当でない過程にしがみついているのだ。これは帰納主義的経験主義的伝統の悪しき一面にすぎない。正当化主義に執着することが非難されるべきことであるように、われわれの保持する、あるいは選択する仮説に(ある程度までであれ)よき理由を与えることができねばならないとか、それを正当化できねばならないという見解もまた非難されるべきことなのだ。ここで考察しようとしている三つの立場も、科学そのものにかんするかぎり、この点では一致している。じっさい、ワトキンズにしてもマスグレーブにしても、科学理論や、経験的証拠言明にしたところで、いつでもそして永久に推測であり、わずかりとも正当化されることはありえないという反証主義に心から同意している。わたくしはより論争的に主張するつもりだが、ベイズ主義もまた、合理的行為者とは自らの科学的見解の正当化を図る者だとするどんな真面目な試みも放棄している。しかし、認識論のレベルで取り上げると、限定された正当化主義が *i.* から *k.* の立場おのおのにおいて欠かすことのできない部分になっている。わたくしが「限定された正当化主義」ということばを使うのは、いま論じている立場のどれ一つとして証拠言明は攻撃できないとか正当化できると説くどんな学説にもコミットしておらず、したがって、[そこで用いられている] 正当化[ということば] はただ証拠との関連での正当化しか意味していないからである。

第3章で主張しておいたことだが、そうした[証拠との関連での] 正当化はどんな認識論上の目的にも役立たない。しかし、役立たないからといって、それを求めることが認識論のレベルで有害でないというわけではないのだ。

ワトキンズは、競合する仮説間での選択は、演繹的に、つまり、入手可能な証拠からの帰結によって正当化されねばならないと考えている。だから、科学の野心をほとんど悲惨なまでに青ざめた姿で描いている。かれは、科学においては反証主義 *h.* の支援者なのだが、メタ科学においては実証主義 *a.* に似かよったものに屈している。マスグレーブも、同じようにして、正当化を必要とするのは、科学上の仮説（あるいは、証拠言明）ではなく、われわれがそれらを受け入れることに対してであると考えている。その受容行為を正当化するために、かれは非常に一般的な（そして、それ自体はあきらかに、正当化できない）原則を挟み込む。反証主義はふたたびひとつのレベルにおいて、メタ科学上のまったくつまらないもの、この場合で言えば、アプリオリズム *d.* の一形態と見えるものに、道を譲っているわけだ。ベイズ主義は異なっている。類似のニヒリスティックな理論と共通しているのだが、それが問題を解くとすれば、科学上の仮説間での選択をおこなおうとするあらゆる試みを文字通り放棄することによってなのである。あらゆる選択枝を除去してしまうなら、勞せずして、すべての選択が正当化されていると保証できるだろう。この解決法は眩い。だから、ひとは簡単に幻惑されてしまい、それがもはやいかなる啓発も提供できないことを見落としてしまうのである。

6.2 理論間での選択

ヒュームは、ある普遍的理論が真であるという判断は入手可能などんな経験的証拠をもってしても演繹できないと論じた。ポパーはこの論証の論難しえないことを認め、帰納の問題をこの線に沿って再定式化した。「真あるいは偽にかんして、競合している

普遍理論のうちのあるものを他のものよりも選択することは……『経験的理由』によってそもそも正当化されうるだろうか」(1972, 8)。この問いに対してかれは次のような答えを与えた。「その通り、運がよければ、時としてそうできる、……われわれは真なる理論を探しているのだから、われわれは、偽なることがまだ確立されていない理論を選択するだろう」。この答えにおいては「正当化されうるだろうか」という表現が使われているが、この表現に正当化主義的な意味合いを過度に求めるべきではないだろう。直接の文脈は、その意味がせいぜい「……から演繹される」でしかないことを明らかにしているからである。たとえば、いま引いた箇所には次のような論評が直接つづいている。「帰納の論理的問題の中心的論点は、ある『所与』のテスト言明との相関のもとでの普遍法則の……真偽である」(*loc. cit.*)。あとにつづく二つの箇所でポパーは自分の論評をさらに明確にしている(1972/1979, 372 および 1983, 20。簡潔さのために、真理接近度にかんする限定句はすべて落とした)。

「わたくしは、真理を見つけるといふわれわれの目的との関連で、競合する理論のうちから他をおさえてある一つのものを選び取るためのよい論証があると言うときには、いつでも、……それらの理論についての討論状況——これに照らして[それらのうちにひとつ]が[他のものよりも]選択に値すると見えることになるわけだが——についての評価を与えることにしている。

「批判的理由は、理論を正当化しない。というのも、ある理論がこれまで他の理論よりも批判に耐えてきたという事実は、なんであれ、その理論が実際に真であると想定する理由にはならないからである。しかし、批判的理由は決して理論なるものを正当化できないとはいえ、そうした理由はわれわれがその理論を(正当化ではなく)選択することを擁護する。……そうした批判的理由は、もちろん、われわれの推測が推測以上のものであると証明することはない

……」

だから、ある理論を他の理論よりも選択することは、討論状況によって決定されていると言えるかもしれないが、それによって正当化されるわけではないのである。討論状況は欺瞞的なものかもしれないのだ。たしかに経験的証拠からは、競合している二つの理論のうち、一つは反駁されているのに他はそうではないとか、反駁されていないものは、真であることにかんして、そのライバルに対して時間を超越した強みをもっているといったことが演繹されてくるわけではない。証拠が意味しているのは、反駁された理論は選択されるべきでないということではない。というのも、その理論は(証拠が真であるかぎり)偽であり、反駁されていない理論よりも(真理をとらえるという点にかんして)よりよいものではありえないということではないからである。反駁されていない理論もまた偽である可能性は排除されていない。したがって、理論間で中立を保つ姿勢が除外されるわけではないことになる。ついでながら(そして、これはポパーが考慮していた状況ではないのだが)、どちらの理論も反駁されていないのであれば、経験的証拠はここでもまた、理論間で、どちらかが選ばれるとしてだが、いずれかが選択されることに対する堅固な基盤をなんら含意していないということである。この点を理解することで、Howson and Urbach 1989 の 4-6 ページにおける「ポパーによる帰納問題解決の試み」と題された節に対して言うべき批判的コメントを言い尽くせる。その節は、その悪評高い正当化主義的家柄にもかかわらず、依然として「反証主義に対する圧倒的な反論」として勝手に宣伝されているのだ。こうである。「反証主義的説明の内部においても、そもそも真剣に考察されるのは有限多数の選択肢に過ぎないと言うことは受け入れられる答えではない。というのも、討論をそれらに限定する純粋に反証主義的理由というものは存在しないからである」(Howson, 1993, 4)。重要な抗争者に注意を限定して——限定したことを

正当化などしなかったという点は措いて——なぜ悪いのかということは語られていないのだ。

6.3 懐疑主義のもみ消し

『科学と懐疑主義』(Watkins 1984、中才 敏郎訳『科学と懐疑論』法政大学出版局 1992 年)は二つのひとしくない部分に分割されよう。懐疑主義にかかわっているのは第一の部分であり、第二の部分は科学にかかわっていると言ったら、誤解を招きかねないかもしれないが、不正確すぎるというわけではないだろう。第一部は、王は死せりと、第二部は、王よ、永遠にと題することができていたかもしれない。正確に述べるとこうだ。第一部は、ワトキンズがヒュームの懐疑主義と呼ぶものを詳説しており、それを克服するという問題がいかに侮りがたいものであるかを明らかにするとともに、細部に労多き努力を払いながら、昔から何度も何度もヒュームに答える満足な仕方として提出されてきた印象的ではない戦術的印象的なリスト(4f)を論じている。そのリストには、アプリオリズム、超越主義(transcendentalism)、非演繹主義、確率主義、現象主義、弁明主義(vindicationism)、プラグマティズム、そして自然主義がことごとく引かれている。このリストは、第五章でヒュームに対する応答として数え上げておいた一二の応答にかなり重なり合うことは明らかだろう。だが、ワトキンズの議論がわたくしのそれよりもはるかに徹底していることは強調しておく必要がある。[ワトキンズの]結論は、生き延びるのはただ一つの戦術、推測主義のみであるということである。この本の第二部は、したがって、次のような試み(xi)にささげられている。

「つまり、ヒュームに対する答えを見つけるという試み。だがその答えは、ヒュームが与えた否定的テーゼの妥当性を受け入れるものであって、それによって傷つけられてしまうものであってはならない。答えは何かしら不法なもの、いかがわしいもの、ぼ

やけたものに訴えるものであってはならない。超越的議論によって『証明された』要請とか、自然の単純性についての仮定とかわれわれの精神が前もって自然に向けて調整されているといった仮定を装った神学、確率計算をもともとそれができないものにも適用できると言いくるめようとする試み、妥当な推論についての演繹主義者の考えを緩めて妥当でない推論も受け入れさせようとする、こうしたことがなされてはならない。」

ワトキンズの目的は、かれが適切に述べているように、「デカルトが失敗したところでそれを乗り越えていくこと、つまり、外界についてのわれわれの主張を懐疑主義の試練にさらすこと、生き延びたわずかのものの助けをえて科学的合理性がなお可能であるのはいかにしてなのかを説明すること」(loc. cit.)である。

この言明はワトキンズの意図を語っているわけだが、わたくしはこの言明に対して嘘いつわりのない同情をもつ。わたくしはまた、この混乱からの唯一の脱出口は、経験的知識でさえそうなのだが、知識は「究極的には……知覚的経験から引き出されたものである」(3)という考えを放り投げることだ、という点でもかれと意見を完全に同じくする。そしてわれわれは、知識は「推測的であり、ただ経験によってのみ否定的にコントロールされる」(4)ということ承認しなければならない、という点でもわたくしはかれに完全に同意する。しかし、わたくしはワトキンズ自身の考えにはほとんど同情をもたない。かれは、推測主義的戦術の、たしかに新しいとはいえ、変種をかれの著作1984の第二部で練り上げた。それは、科学の目的としての真理(あるいは、真理接近度さえ)を犠牲にし、代わりに可能的真理という血の抜けた遺骨で置き換えるという変種であった。わたくしは幻滅を味わった。幻滅の根源にあったのは、ワトキンズが研究への刺激をえていたと言っていた問い、つまり「なぜもっともよく検証された(corroborated)理論はもっともよい理論であるの

か」(xv)という問いであった。こうした一般的な
ことばで述べられるとわかるのだが、この問いは明
らかに正当化主義的答え、つまり、競争相手を凌駕
するもっともよく検証された理論の選択を正当化す
る答えを求めている。そうしたものとしてこの問い
は推測主義者からの考察をほとんど受けるに値しな
い。自分の答えにはなほだしい不安があったのだろ
うし、ポパーが 1972 でおこなった（前節で論じて
おいた）帰納問題についての再定式についての狭い
読みもあつてのことだと思うが、ワトキンズはみず
からのプロジェクトを変形させてしまって、もっと
もよく検証された理論があらゆる場合において科学
の最適目的をもっともよく達成する理論であること
（1984、第 8 章、とくに 279,304-06 ページ）は、
証拠（あるいは討論状態）からの演繹的帰結であり、
また弱い意味でそれによって正当化されるという点
を確立するプログラムにしてしまったのである。も
し科学の目的が真理であるならば、こうしたことは
明らかに成立しないのだから、かれは科学のゴール
ポストを動かしてしまい、科学の目的として真理よ
りも可能的真理に威厳を与えたのだ。わたくしには、
これは重大な降伏であり、地上に恩恵をもたらすも
のではないと思われる。

ワトキンズは、科学の最適目的がどのようなもの
であらねばならないかについて、自身まったく問題
がないだろうと願う五つの適切性要件を提出し、叙
述を始める。それらのうちの最初の四つは、整合性、
実行可能性、「競合する理論や仮説間での選択に際し
て指針として役立つ」能力、形而上学的公平性であ
る。第五の要件は、うまく表現されているなどとは
言えないのだが、科学の目的は「真理の観念を含む」
べきであるというものである（124）。ワトキンズが
素描しているのは、こうした適切性要件が満たされ
るならば、どんな人でも科学にとっての最適目的と
して是認するであろうとみずから思い描くものであ
る。それは、ベーコンおよびデカルトの理想という
かたちで述べるならば、全世界の動き方についての
究極的説明、つまり、絶対的に正確で全能の予測能

力を持ち、くわえてなにものにも勝って確実に真で
ある説明を要求するものである。ワトキンズのこと
ばではこうである（129）。

「あらゆる経験的現象が、初期条件の真なる記述
と、確実に真で究極的で統合されているとともに正
確である普遍的原理との連言から、説明され予測さ
れるようになること。」

しかしながら、事実上〔ワトキンズの見た〕夢の
どの小片とてそれ自身において実現されうるもので
はない（それゆえに目的は実行不可能である）。いわ
んや、他の小片と仲間になれるわけでもない（した
がって目的は整合的ではない）。さらに、究極性の要
求は形而上学的に中立でもない。したがって、ワト
キンズはベーコンおよびデカルトの理想を流し去っ
て「科学は、説明的理論が」その先行者よりも「ま
すます……（B1）より深く、（B2）より統合され、
（B3）予測においてより強力であり、そして（B4）
より正確であるように進んでいくべきだ」と要求し
ているのだ（133）。確実な真理の要求が、同時に、
われわれの理論が（A）ますますありそうなもの
（probable）になることへの要求へと縮小されてい
る。ところが、この条件（A）は 4 つの条件（B1）
・（B4）と同等であるとワトキンズはどこにおいて
も言っていない。ポパーにしたがって、ワトキンズ
はこれら五つの条件は相互に整合的ではなく、し
たがっていずれにしても、（A）は実行不可能である
と考える（133-36）。ワトキンズはこの立場、つま
り、「外界にかんする不確実な仮説が、多かれ少な
かれ真でありそうなもの（probably true）として確立
されることはあり[えない]」という立場を確率・懐
疑主義(probability-scepticism)と呼ぶ（58）。かれは、
「もしベーコンおよびデカルトの理想が内的首尾一
貫性をもつとともに実行可能とされるべきであるな
らば、与えるべきは要請（A）である」（135）と結
論する。

より大きな確率を要求するというなじみの要請

(A) は、しかしながら、何か別なものによって置換されるべきである。なぜなら、そうでないとしたら、第五の適切性要請はかなえられないであろうから。第一章でわたくしは、ここでなされるべき明白なことは、科学の目的としては真理そのもの (plain truth) をとることに戻るべきであると述べておいた。というのも、これは、いつでも、確実な真理についての度を越した強調の背後にあるものだからである。しかし、これはワトキンズが決してとることのないルートである。かれは次のように書いている (155f)。

「(A*) 科学は真理を熱望する。あるとき人物 X によって採用された科学的仮説の体系は、かれにとってはおそらくは真である (possibly true) べきものなのだ。その意味は、かれは、最良の努力にもかかわらず、その中に、あるいはそれと入手しうる証拠とのあいだに、いかなる不整合も見出していないということである。」

(A*) は、(B*) と呼ばれる科学の最適目的を産み出すために (B1) - (B4) に追加されるべき要素なのである。それは、「A から、救出しうる最強の実行可能な核」であると、ワトキンズは語る (155)。

ここからわれわれはなにを取り出すべきなのだろうか。われわれに告げられているのは、科学は真理を熱望している (同じ表現が 280 ページでも使用されている) ということだ。これは、真理をまさに目的にしているかのように響く。ところが、悲しんでくれる者のいない (A) から実行可能なものとしてせいぜい取り出せるのは可能的真理だと告げられているのだ。だとしたらただちに帰結してくる結論は、真理は実行可能な目的ではないということ、つまり、ところ、真理は可能的真理よりも強いということだろう。ところが、ワトキンズが言わんとしているのは断じてこの点ではないのである。かれは、適切性要請を導入したとき、まったくぶっきらぼうに「目的は、実現されえないと知られているならば、実行

不可能である」(124) と言う。とはいえ、たしかにこれによって真理が実行不可能な目的にされるわけではない。というのも、おそらくわれわれは真理が目的として充足されてきたことを知りえないとはいえ、真理が目的として充足されうることは知っているからである。ところが、違うのである。ここでワトキンズが真に言おうとしているのは、真理は目的としてかれの第三の要請、つまり、真理は「競合する理論間での選択においてガイドとして奉仕し」なければならないという要請を侵害するということなのだ。かれは次のように書く (125)。

科学は、ますます ϕ である理論をもって、……あらゆるもののなかでもっとも ϕ である理論を (おそらくは達成不可能な) ゴールとして進むべきであると提案されたとしてみよう。さらに、「理論 T_i は理論 T_j よりもいっそう ϕ である」というかたちの主張に明確な意味は与えられているのだが、こうした主張の真偽を評価する可能性は存在しないと仮定してみよう。このようなとき、この目的は実行可能であろう。すなわち、一連の理論が……正しい方向に進んでいくことは可能である。ところが、われわれは、正しい方向に進んでほしいと望む一方で、おなじく、正しい方向に進んでいないと恐れるかもしれない。こうした目的は[第三の要請]を挫折させるだろう。……

しかし、ある理論が真であり、他は偽であるという主張の「真偽を評価する可能性はない」と言うのは、「評価」ということばの意味が「正当化できるかたちで評価する」ということでなかったら、まったくの誤りであるように思われる。驚くべきことに、ワトキンズは、みずから推測主義者と名乗っているにもかかわらず、そう言おうとしているように見えるのである。というのは、かれの中心目的は、すぐわかることだが、確率・懐疑主義を重大視するよりは、懐疑主義の一形態を敗北させることにあるからである。理由づけに かんする 懐疑主義

(rationality-scepticism) ということでは、ワトキンズが言っているのは、「われわれは、外界についての仮説を採用するにあたって知識の獲得にかかわる (cognitive) なんらかのよき理由をもつことは決してない」(58) という学説のことである。じじつ、『科学と懐疑主義』が反撃しようとしているのはまさにこの学説である。ワトキンズが見出す唯一の反撃法は、「好都合な状況下では、競合する理論のうちのどれがああ目的をもっともよく充足するかを知る[ワトキンズにとっては、この太字にした「知る」という語はうまくいっている (success) ことを示す語である。11 ページを見よ]ことができるように、科学の目的を手直しすることなのである。さて、経験的基礎の可謬性 (上述の 2.2 節 c を見よ) のゆえに、われわれは外界についてのなんらかの仮説の真偽を知ることができないし、その仮説が証拠と整合的であるかどうかを知ることさえできない (155)。せいぜい知りうるのは、その仮説を徹底的にテストし証拠とのあいだに不整合を見出さなかったということだけである。だから、理由づけにかんする懐疑主義に捕えられる恐怖を避けようと思えば、そのこと[不整合を見出さなかったということ]が、(A) のうち、(A*) に含めうる一切だということになる。科学の目的は、われわれに判断しうるかぎりで実験や観察にもとづいて反駁しようとする最良の努力に耐え抜く・より深い理論の発見に縮んでしまう。これは実行可能な目的ではあるが、本来はそれ以上のものを目指して企図されていたのだ。状況が適正であるなら、われわれの所有するある理論が他の理論よりも目的をよりよく充足すると主張しても、正当化されうるといふわけだ。

ここで何が生じたのかはかなり明白のように思われる。つまり、ワトキンズは、現実には目的を獲得するための (実行可能な) 手段にすぎないものを目的[そのもの]という地位に昇進させ、そして (そのための場所を作り出すために) 本来の目的を、熱望されるものというランク付けをして二階に祭り上げてしまったということだ。かれは帰納推理には極度

の嫌悪をもっていたから、そもそもわれわれがある理論を他の理論よりも合理的に選択すべきだとしたら、つまり、理由づけにかんする懐疑主義を拒絶すべきだとしたら、われわれは演繹的推論のみでやっていかねばならないだろう、と結論するに至ったのだ。だから、批判的討論の状態のみから、提出された理論のうちのどれが科学の目的をもっともよく充足するかを決定できなければならないということになるのだろう。「外界にかんする仮説を採用するにあたっての知識の獲得にかかわるよき理由」——これは、理由づけにかんする懐疑主義がその存在を否定するものである——は、決定的な、あるいは、十分な理由でなければ、ワトキンズにとってはまったくもって理由ではないということなのだろう。そうでなければ、帰納推理 (あるいは、そのようないかがわしいもの) にもとづく理由ということになるのであろう。そしてわれわれの選択にとってのよき理由が存在しないのであれば、それは、ワトキンズにしたがうかぎり、「コントロールされていないあて推量」(287) ということになる。

ところで、わたくしはワトキンズと同じように偽造された推論チケットを嫌う。また、同じく「コントロールされていないあて推量」への嫌悪も共有する。しかし、わたくしはコントロールされたあて推量なら、それを称賛する。じっさいわたくしは、よき理由などというものよりもコントロールされたあて推量をおおいに選好する者である。で、不思議なのだが、ワトキンズは、わたくしに劣らず科学内での大胆で想像力に富んだ、だがそれにもかかわらずコントロールされている推測を評価するにもかかわらず、話が科学に及んだとたん、なぜ推測に好意を示そうとしないのだろうか。ワトキンズは、ルイスの一家言、つまり、「何かがありそうだ[というならば]、なんらかのものは確実であるに違いない」を論評なしで引用している (1946, 186) のだが、かれ自身の仕事の背景に同じような格率が潜んでいることはきわめて明白であるように思える。すなわち、なにかが合理的にコントロールされた推測であるなら

ば、それは推測ではないなんらかのものによってコントロールされているに違いないという趣旨の格率である。わたくしは急いで強調しておかねばならないが、ワトキンスは科学そのものの内部でこうした定式をなんら裏書していないということだ。すなわち、ヒュームの懐疑主義に対する推測主義者の応答は、結局のところ、あらゆる総合的言明が推測であるとしても、科学的知識がいかにして可能なのかを示すことにある。ところで、推測はコントロールされねばならない。よってワトキンスは、このことを別のレベルで企てられるべき課題と見なす。なぜなら、推測は推測をコントロールできないから、われわれは強固なメタ・科学的予防法によってそれらをコントロールしなければならないというわけである。ここでかれは、比較にもとづく真理接近度をどう評価するかという問題について次のように語るをえない (287)。

しかし、真理接近度についてのあらゆる評価が、決して肯定的に正当化されない推測であるならば、もはや……[ある]評価を……[それとは反対の評価]よりも正当化する可能性は存在しない。以前の推測についての「批判」は、競合する同じく正当化されない推測、つまり、他の推測に対して競争させられた形而上学的主張以上のものではないだろう。……もし真理接近度についての評価が推測でしかありえず、また、二つの理論が真理接近度にかんして比較可能であるならば、それらについての真理接近度の観点からの比較評価はいかなる真正の批判的コントロール下にもありえない。

しかし、こうしたコメントがことごとく見落としているのは、推測は、他の推測によって、強制されるわけではないにせよ、コントロールされうるという点である。リベラル・デモクラシーの控えめではあるが真正の成功は、チェック・アンド・バランスの理論が政治において働きうることを示している。それはまた、世界はどうなっているのかの発見に向

けて十分な心配りがなされるならば、つまり、真理について十分な心配りがなされるならば、科学においても働きうるのである。ポパー(1945b, 第7章、および1960/1963, 第15節)は、政治理論が方法論から多くのことを学ばねばならないことを示したが、反対の方向でも重要な教訓があるのだ。

ワトキンスは必要もないのに正当化主義に滑り落ちていった。だが、わたくしはそれとは反対に、理由づけにかんする懐疑主義は十分に奉じるに値する学説であると言ってみたい。じっさい、「われわれは外界にかんする仮説を採用するにあたって、知識の獲得にかかわるなんらかのよき理由をもつことは決してない」(Watkins *op.cit.*, 58)。しかし、懐疑主義は誤りである。われわれには、どうしてもなく可謬的な仕方においてではあるとはいえ、真なる仮説と偽なる仮説を分離する仕方があるのだ。非合理主義もまた誤りである。われわれは決して理由(reasons)をもちえないだろうが、われわれには理性(reason)があるのであって、真理の探究においては始終それを使うのである。こうしたことはすべて上述の第三章で仕上げておいた。さらに理由づけにかんする懐疑主義は確率・懐疑主義を含意するわけではない。ワトキンスは、「われわれは、一般的に言って、数多くの代替的仮説から、われわれの現在の証拠のもとで、おそらくはもっとも真であると思える仮説を選択できるならば、たしかに懐疑の森から抜け出せるだろう」と主張している(42および58も見よ)。わたくしには理解できない。じっさい、わたくしは確率・懐疑主義をそもそも懐疑主義の一形態であるなどとは見ていない。真理が目的であるならば、われわれのさまざまな仮説がどんな確率をもつかなどといったことはどうでもいいことである。

それでは検証についてはどうであろうか。ワトキンスによれば(*op. cit.*, 279)、「なぜ、検証が問題なのか」は、ポパーに対する批判者たちがしばしば提起した問いであるが、満足のいく形では決して答えられていない。だから、もっともよく検証された理論はもっともよく科学の目的を充足するという答え

をするために、科学の目的は(B*)にまで刈り込まれてしまうのである。(B*)のうち〔真理そのものではなく、真理でありそうなものを目的とする〕可能主義の立場にたつところの真理・要素(A*)を拒否する者は、なんらかのよりよい答えを与えることができるだろうか。ここで思い出されねばならないのは反証主義的認識論では、テストに通ることは、理論の先行きを安全にするとか、確証するとか、なんらかの仕方で輝かしいものにするといったこととは一切関係ないということである。にもかかわらず、問いには満足のいく仕方で答えることができる。

答えは、検証は実践の領域においてさえ重要ではないということである。ポパーがいつも強調していたようにそれに認識論上の意義はない。しかし、テストは重要であるし、否定しえない方法論上の意義がある。われわれは真なる理論を欲している。テストが重要なのは、理論をテストに服させることによってしか偽なる理論を排除する機会を得られないからである。そして、テストがきびしければきびしいほど、そうした機会が豊富になる。状況は次のように言い表せるかもしれない。理論がテストで失敗するとき、われわれは何事かを学ぶがなにも知らずに終わる(われわれが知っていたこと、つまりわれわれの理論は除去されてしまったからである)。しかし、理論がテストに通るとき(つまり、検証されたとき)、われわれは何事をも学ばない(なぜなら、テストの結果がなんでありつづけるかをわれわれはすでに知っていたからである)が、何事かを知りつづけている。検証は、もし科学が存続すべきであるならば、疑いもなく必要である。というのも、そもそもどんな理論も検証されないとしたら、科学は存在しないであろうから。しかし、検証は科学の成長、進歩にはいかなる貢献もしない。ポパーの有名な第三の要請は、「検証主義のひと吹き」(1963, 248, note 31)ではなく、真理接近度主義(verisimilitudinism)のひと吹きと呼ばれるものを体現していると思わなければならない。

6.4 化粧した合理主義

上述の 3.4 でのテーゼはこうであった。つまり、よき理由、あるいは、好都合な理由があったとしたところで、それらは認識論的には役に立たない飾り物であろうし、科学上の理論を真と偽に分ける助けにもならず、われわれの実践的な意思決定に対してそれらなしでは獲得されていなかった理由を追加してきめかせることもできない。このようなよき理由とか正当化といった余計なものが目もくらむほど明白に現れているところは、マスグレーブが説いたかたちでの批判的合理主義においてほかにはない(1989a, Section 3; 1989b, Section 3; and 1991)。かれは、最近の入門的な本のなかでそれを可謬主義と呼んだ(1993, Chapter 15)。これは残念なことである。可謬主義はふつう、いかなるものも確実に知られることはないという認識論上のテーゼとして理解されているからである。せいぜいのところ、それは批判的合理主義あるいは反証主義への前座のようなものであって、いかなる意味でも、探求がどのようになされるべきかについての方法論的テーゼではない。ワトキンズと同じように、マスグレーブも科学そのもののレベルにおいては反証主義者である。かれは、科学の理論は決定的であれそうでないのであれ正当化される必要があるとか、そうされうというあらゆる示唆を拒否する。かれはあらゆる様式の帰納的論証を拒絶する(1989, Section I)。かれにとって科学の方法とは、惜しめない批判によってたしなめられる大胆な推測の方法である(1993, 281)。しかし、ワトキンズと同じように、マスグレーブは、理論間でのわれわれの選択、あるいは、どの理論が受け入れられるべきか、あるいは、信じられるべきかについてのわれわれの決定は、めちゃくちゃな非合理主義を避けるべきだとしたら、正当化される必要があると考えている。かれは、理論(あるいは、信念)の正当化と、それを受け入れること(あるいは、それを信じること)の正当化とを峻別する。マスグレーブの主張では、それ自身まったくもって正当化さ

れていない理論を受け入れることが正当化される（あるいは、合理的である）かもしれないのだ。批判に屈する理論は、もちろん、拒絶されねばならない。しかし、批判に耐えた理論は、マスグレーブによれば、合理的に受け入れられたり、信じられてよいのである。

わたくしが 3.3 で主張しておいてように、あらゆる正当化は単純に権威にすぎるものでないとしたら、循環するか、先送りであるのだから、マスグレーブが語るような理論の合理的なあるいは正当化された受容はいかにして可能なのだろうか。先の章で注記しておいたように、マスグレーブは合理主義者に、かれが知識の獲得にかかわる (epistemic) 帰納原理と呼ぶものに結びつくように強いる。この原理は大胆にも、よくテストされそして反駁されていない理論、より一般的に言うと、きびしい批判的探求を生き延びた理論を受け入れることの合理性を主張するものである。じっさい、かれはさらに進んで、「どんな演繹主義者であっても、かれが全面的な非合理主義者でないならば、なんらかの帰納的[知識の獲得にかかわるものだが、形而上学的ではない]原理を受け入れなければならない」とさえ主張している (1989a, 332; 修辭的強調はマスグレーブのもの)。こうした原理——1.1 において命名したものと同じではないのだが、*P*と名付けておくことにしよう——をもちいて、われわれは次のようなかたちの手短な導出を容易に考えることができよう (1991, 26)。

知識の獲得にかかわる帰納原理 *P*

*H*はきびしい批判的探求を生き延びた

*H*を受け入れることは合理的である

したがって、*H*が課せられたテストに満足のいく形で通ったならば、われわれは *P*のもとで、*H*を受け入れることは合理的であると結論することができるだろう。この論証は、文句なく、演繹的である。帰納原理 *P*は、大前提を形成しているわけだが、言うまでもなく正当化されていない。しかし、マスグ

レーブによれば、これは問題ではない。必要なのは、*P*の正当化、つまり、*P*のための理由——これらは「ただちに、理由に対しては理由をもとめ、それを無限につづけることを要求するだろう」(*op. cit.*, 29)——ではなく、*P*を採用するための正当化、つまり、*P*を受け入れるための理由である。そしてこれを得ることは、かれの言うところによれば、可能なのである。なぜなら、*P*は批判的に検討されており、試験を生き延びてきたからである。したがって、*P*自身の規準によって、*P*は合理的に受け入れられてよいのである。

マスグレーブは、この導出の心臓部にある種の循環あるいは無限後退が存在するという事実を隠そうとはしない。バートリーの CCR (上述の第四章) の主張を意識してかれは次のように書いている (*op. cit.*, 29)。

このレベルの抽象においては、循環は避けがたい（一般的な知識の獲得にかかわる原理はどんなものでもこの循環に服することになるだろう）し、それに代わるものはさらにいつそう悪い。ひとつの代替案は端的に *P*を要請し、それを採用する理由は与えないことである。……他の代替案は *P*を採用する理由を与えることだが、……それは批判的合理主義者のよしとするものではない……どちらの代替案においても、批判的合理主義者は批判的合理主義そのものにかんして批判的合理主義者ではないのである。

のちにかれは、「可謬主義は可謬主義の規準によって合理的に信じられると示すことは、……循環して論じることである」と言っている (1993, 294)。しかし、これはかれの立場をあまりにも軽々と放棄するものである。かれの原則 *P*の本当の状況ははるかに不快なものである。それは、*P*が一般的にどう展開すると想定されているか、また、*P*がとくに自分自身にどう適用されるのか、を注意深く見ていけばわかるであろう。難点は、手みじかに述べておくが、*P*の受容を正当化しようとする試みにおいてマスグ

レーブは P の真なることを仮定しているということだ——実際にはそうする資格はかれには少しもないのだが。次の、少しばかり錯綜したパラグラフで、わたくしは闘うつつもりはないのだが、マスグレーブが明言している (1991, 26) 第二の原理にも触れておく必要があると思っている。それは、合理的に受け入れられた言明の演繹的帰結はそれ自体、合理的に受け入れられる、という原理である。これには、合理的受容の移転原理として言及することにしよう。

科学理論 H は十分にテストされ、傷つけられることなくそのテストを通過したという報告 e があったとしてみよう。この証拠報告 e は真であるばかりでなく、真であることも知られているとしてみよう。よく知られていることだが、前提としての e から結論としての H に至る演繹的推論は存在しない。 P を前提として追加するならば、 H を受け入れること (もつとも、 H は真であると推測してはならないのだが) は合理的である、と演繹的に推論してもよいことになろう。さて、 e と P とから「 H を受け入れることは合理的である」への演繹の妥当性が意味するところは、 e が (すでに認めておいたように) 真であり、そして P も真であるならば、「 H を受け入れることは合理的である」は真である、ということではしかない。 H を受け入れることは合理的であると結論する立場にたつためには、依然として P の真なることを知る必要があるだろう。しかし、マスグレーブは、 P の真なることはわからないし、また P の真なることの理由をもつことさえできない (なぜなら、「ただちに、その理由のための理由が要求され、それは無限につづくであろう」から) と認めている。われわれがせいぜいもつのは P を受け入れる理由である、とかれは認めている。合理的受容の移転原理を用いて次のような妥当な演繹、すなわち、

知識の獲得にかかわる帰納原理 P

e

H を受け入れることは合理的である

から取り出せる結論は、 H を受け入れることは合理的であるということを受け入れることは合理的であるというものだろう。しかし、それ以上のものを取り出すことはできそうもない。だとすれば、 P を大前提としたこのようなタイプの演繹からせいぜい引き出せるのは、「……を受け入れるのは合理的であるということを受け入れることは合理的である」という二重に繰り返された様相である。だが、その時には同じことが以下の演繹にもあてはまることになる。

知識の獲得にかかわる帰納原理 P

P はきびしい探求を生き延びた

P を受け入れることは合理的である

われわれは大前提 P を知らないのだから、 P を受け入れることは合理的であるという結論を得るために、この演繹を使用してはならないであろう。ただか結論しうるのは (この大前提を受け入れることが合理的であると仮定してのことだが)、 P を受け入れることは合理的であるということを受け入れることは合理的であるということであろう。換言すれば、マスグレーブの知識の獲得にかかわる帰納原理 P は、それ自身を受け入れるための理由を与えるために使用することは決してできない。論証は循環的であるのではなく、—— H のための理由と H を受け入れるための理由とについてのマスグレーブの批判的区別が維持されるとしてのかぎりのだが——厳密に言って後退的である。論証から引き出すことのできるものの地位は、大前提の地位よりも必然的に防御された (hedged) ものである。たしかに、この点で (A を「 $\sim$ を受け入れることは合理的である」としたとき) AAH から AH が導出されるようになんらかの補助的前提を転がり込ませることはできるだろう。われわれがやっとの思いで踏み渡ってきたのと同じ論証がこの新しい前提に対しても適用されることになるだろう。それは、おそらく、分析的にあるいは

論理的に真であるのではなく、そしてわれわれがそのために望みうる最良のことは、それを受け入れる理由が存在するということである。そうした理由があったとしたら、そうした前提の助けによって「 H を受け入れることは合理的である」というかたちをとった任意の結論を受け入れても合理的であるということになるかもしれないが、 H を受け入れることを合理的にするわけではないだろう。とりわけ、 P を受け入れることを合理的にするわけではないだろう。そしてもし、 P を受け入れることが合理的でないとしたら、上に描いた図式的な演繹は、なんらかの興味ある結論に到達しうるものではないだろう。

(このパラグラフの実質的内容は本章末尾のテクニカル・ノートのなかでより形式的なかたちで繰り返しておいた)。

マスグレーブは、知識の獲得にかかわる帰納原理 P (あるいは、なんらかの似たような原理)を受け入れるための理由を何ら示してはいない。マスグレーブの正当化主義的形態をとった合理主義は、他のすべての同類と同じように、それ自身に照らして非合理である。しかし、この反論は棚上げされたと、そして P は合理的に受容可能であるばかりでなく現実に受け入れられたと想像してみよう。(おそらく、誰かある者は、条件法「 AAH なら AH である」は論理的真理である、とわれわれを説得することに成功することだろう)。その時われわれは、適合的な H について H を受け入れることは合理的であると結論できるかもしれない。さて、わたくしの問題はこの結論に対して何をなすべきかということである。われわれには、あきらかに、 H を受け入れるとか、真として分類する権限はない。われわれにはそれを推測するライセンスさえ与えられていない。こうしたことは共に、個別的前提から普遍的結論を産出する帰納ルール復活に等しいであろう。理論 H の受容可能性と理論 H そのもののあいだには溝があり、その溝を批判的合理主義のマスグレーブ的変種は架橋するには力不足である。(Carroll 1895 において生じていることと対照せよ)。たしかに、自由に(ある

いは、推測で) H を受け入れることを妨げるものはない。またそれがマスグレーブの意図するすべてなのであろう。つまりかれは、「 H を受け入れることは合理的である」という結論はわれわれがおこなっていることについての注釈以上のものではないと意図しているのだ。しかし、そうだとしたら、あきらかに、合理性、よき理由、正当化があるといった主張はすべて、窓飾りでしかない。われわれが実際にやっていることは自由な推測にふけり、それをきびしいテストにさらしつづけることである。推測 H へのなんらかの理由があるかどうかはどうでもいいことであるように思われる。

強調しておきたいが、上に述べた線での議論は CCR, つまり(上述の第四章で論じておいた)パトリの包括的に批判的な合理主義にはあてはまらない。CCR においては、なんらかの立場を受容するにあたって正当化はなんら必要とされていないように思われる。[CCR においては]、推測を除去するために最善の努力をするかぎり、好きなように推測してよいのだ。マスグレーブは、手みじかにかれ自身の立場と CCR を比較している (*op. cit.*, 30) が、かれ自身の観点の正当化主義的脆弱さとパトリの批判的強靱さとのあいだにある本当のコントラストを満足のいく形で明るみに出すことには失敗している。

上述の 3.3 で、わたくしは、どんな理論に対しても、決定的であるとそうでないとを問わず、よき理由といったものは存在しないと主張しておいた。マスグレーブは、この点に同意するものの、理論を受け入れるためのよき(決定的ではない)理由なしの合理性に絶望しているのだ。マスグレーブは(かれの 1988 が示しているように)頑強な実在論者であるとはいえ、その立場と反・実在論とのあいだには灰かどころではない類似性がある。反・実在論においては保証された主張可能性が、保証されていない真理のもつ王位を篡奪しているのだから。しかし、理論のための理由、あるいは、理論を受け入れるための理由があるかどうかは、本当のところは、どうでもいい

ことなのだ。理由であるとされるものは、いったい何のための理由であるというのか。決定的でない理由の無益さは悪臭を放つほどなのだが、それが十分に理解されていない（わたくしは、3.4 でこの点について仕事をしておいた）のだと思う。理論を受け入れるよき理由があったとしたところで、その理由なるものは真なのか（あるいは、こう言いたければ、それを真として受け入れることは真なのか）という問題が避けがたく残る。この問題こそわれわれの知りたいことであり、正当化主義的な戯言〔理由〕がどれほどあったところで、それはわれわれを欲しているところに近づけてくれるわけではない。マスグレーブの手において「 H を受け入れることは合理的である」という表現は「 H はきびしい批判的検討を生き延びた」という表現の同義語以上のものではない（したがって、原理 P は定義によって真である）と結論せずに済ますことは困難である。もちろん、マスグレーブはこれを否定する(*op. cit.*, 27)。だが、そこに違いがあるならば〔つまり、同義語ではないというならば〕、それは違いを産み出さない違いである。

6.5 純粹ベイズ主義

ベイズ主義への批判は豊富にある。それらにさらに付け加える必要があるのかと怪訝に思われるかもしれない。グッドはその 1971/1983 で 46656 種のベイズ主義をカタログ化した。が、たしかにそのどれもが少なくとも、最近提起された致命的な反論の一つに屈してしまう。そうだろうと思う。しかしながら、ここでのわたくしの目的は、その力がわたくしにはまったくと言っていいほど評価されていないように思えるひとつの苦言に焦点をあてることである。簡潔に述べると、その苦言とは、ベイズ主義は帰納の問題への解を与えているとは言いが、そのときには、真理のための戦いにまったく関心をもたなくなってしまう、人間の知識についての受動主義的な理論——科学が営まれているときに何が生じているのかに

についておおざっぱに記述はするが、説明は決してしない理論——を選択しているというものである。ベイズ主義はこのように責任を放棄してしまっているにもかかわらず、この点がしかるべく際立たせられることはほとんどない。それは、たとえば、ホーソンとアーバックの 1989 の告別の章では、ほのめかされてさえいない。その章は、「主観的なベイズ主義的理論は、……多くの批判的注目の対象になってきた……[そして]依然としてある種の影響をもった領域においては絶望的な困難によって無効にされたと見なされている」(257) という告発に対する返答をしようとするものだったのだが。科学を理解しようとするにあたってベイズ主義が繰り返した数えきれないほどの失敗は、ベイズ主義に対するなんらかの著名な批判者によって認識されていないように思われる。かれら批判者たちは、いくつかの欠陥を認めているのだが、驚くべきことにこの立場がいかに不満足なものであるかを承認しようとしないのである。たとえば、アーマンは、自分は週のうち三日はベイズ主義者であるが、残りの三日は非ベイズ主義者であると言い、「ベイズ主義の確証理論にかんするわたくしの検討結果は単純な賛成でも単純な拒否でもない」(1992, 5) と報告している。キッチャーは、ベイズ主義をとることはないと明言しているが、にもかかわらず「少なくとも、ベイズ主義的概念の価値が判明する二つの仕方がある」(1993, 293) と考えている。同様に、グライモールはなぜベイズ主義者でないのかという告白を次のようなことばで締めくくっている。「こうした論証のどれ一つとしてベイズ主義的図式への反論として決定的ではないし、またそうであるべきものでもない。というのは、いくつかの点でその図式は疑いもなく正しいのだから」(1980, 93)。わたくしは全面的に不同意である。そして、ローゼン克蘭ツが「グライモールは……ベイズ主義者である。ベイズ主義の旗のもとで行進する多くの者よりもいっそうそうである」(1983, 69) と言い返したとき、それはグライモールに対して正当だったのではないかと思う。わたくしのテーゼは

こうである。ベイズ主義的立場にはそもそも価値あるものはなにもない——こう言ったからといって、ベイズ主義者は科学の理解に価値ある貢献をすることが一度もなかったと言っているわけではないが。ベイズ主義の成果に対するこの深い不同意を説明することは簡単にできる。わたくしの心には(しかし、あきらかに、他の人の心にとってではないが)、ベイズ主義は幻想としての問題(とりわけ、「科学的推論の問題」や「確証の問題」)に固執した哲学と映るということだ。それは間違っている——ベイズ主義は間違いなのだが——というよりも、頑迷なのだ。それは、説明されるべきであったものを説明しないままにしているし、説明される必要のなかったものを説明しているのだ。そこに健康なものはない。ベイズ主義は科学活動の目的を説明していない。わたくしは、それは理論的でも経験的でもない活動の目的を説明していない、と言っておきたい。それはまた、科学の客観性も合理性も説明していない。

わたくしが関心を限定したいと思っているベイズ主義の純粋な変種は、純粋でない言い方をすると、次のような学説である。科学的仮説の真理値は確実性をもって語ることはできないのだから、そもそも語らないのがもっともよいのであり、そんなことをする代わりに、仮説が確実性に接近する程度のみに関心を持ち、入手可能な証拠 e のもとでの仮説 h の確率 $P(h|e)$ をもって、その仮説に対するわれわれの態度としておくべきである。この学説は、二つの仮説のうちより確率の高い (probable) ものがよりよいものであると言っているのではなく、ただ、それはわれわれがより信頼を割り当てるものであると言っているだけである。確実性の度合いは、確率計算のなんらかの多かれ少なかれ標準的な公理にしたがうべきことを示そうとする数多くの論証がある。わたくしは、それらと張り合うつもりはない。公理が確率に課すもっとも重要な制約はベイズの定理、つまり、ベイズ主義にその名を与えている些末な成果である。ベイズ主義のもとでは、ベイズの定理は新しい証拠 e に直面したとき仮説 h の確率を更新する

処方箋として解釈されている。つまり、こうだ。新しい確率 $P(h|e)$ は、 $P(h)P(e|h)/P(e)$ と等置されるべきだというのである。これは、ふつう、(ベイズ主義的) 条件化 (conditionalization) と呼ばれている。よく知られていることだが、確率の公理自体は、いくつかの極限的な場合とか、ほとんど争う余地のない場合とかをのぞいて、関数 P に対する値を決定するものではない。そして確率それ自体がどう評価されるべきかは、ベイズ主義者自身が見解を異にしている論題である。少数派の意見では、厳密に客観的な仕方でも多くの h や e に対して $P(h|e)$ の正しい値を決定するルールを設定できるという。(この立場の先鋭な表明については、Rosenkrantz 1977, Chapter 3.5 を、そしてそれに対する先鋭な批判については、Seidenfeld 1979 を見よ)。しかしながら、こんにちでは大多数のベイズ主義者は主観主義者か個人主義者 (personaist) であり、 P に対する正しい値の割り振り[値の分布]はまれでしかないと考えている。つまり、割り振った値が全体として公理を充足するならば、各行為者がどんな値を採用するも自由であるということだ。両方の党派が一致するのは、重大な誤りのリスクなしに、客観的なルールに訴えるにせよ、あるいは賭け事のような操作的な手続きによるにせよ、 $P(h|e)$ の値を決定することが必要であるという点である。強調しておきたいが、ここに述べた短いコメントは、ベイズ主義的哲学への非常に表面的なガイドたることを意図しているにすぎない。この哲学は、さまざまな実践者のあいだで尋常ならざるほど多様な形をとっている。わたくしがここで述べたほとんどすべての原理が、修正されたり、限定されたり、それどころかあれこれのベイズ主義者によって放棄されてきさえした。だが、コアになる立場は存続している。それはこうだ。真と偽については忘れてしまえ、そして確率の評価にだけ信頼をおけ。

わたくしはすでに 1.1 で、これがなぜ、理論科学にとっても実践上の行為にとっても、科学は確実性を探求するという支持できない学説からの絶対的に

誤った退却であるのかをながながと説明しておいた。正しい動き——わたくしはこれが退却であるなどと思ったりはしないが——は、科学は真理を探求するのだという見解を保持し、その探求はそれ自体としては不確かだと承認することである。仮説ばかりでなく、それらについてのわれわれの評価もあらゆるところで誤りを犯す可能性をもっているのだ。これとは対照的にベイズ主義は、上述の 6.3 で批判しておいた哲学にも似て、仮説のレベルにおいて誤りに陥ってしまうことの避けがたさを、仮説の評価のレベルにおけるある種の水も漏らさぬ装置によって、緩和しようと望んでいる。不幸なことに、上述の 6.4 で批判しておいた哲学におけるように、[ベイズ主義が] なしうる評価は取り返しがつかないかたちでわれわれの当初の関心を切り離してしまうのだ。確実な真理は演繹的に真理を含意する。しかし、この含意は、確実性が確率に希釈されてしまうと、解体してしまう。確実な真理は確実性をもって獲得された真理であろう。だが、おそらくは真であろうといったものは——真であらねばならないわけではないのだから——確率をもって獲得された真理ではないのだ。真理とおそらくは真であろうといったものの関連は、真理と真であるとうわさされているものとの関連よりも、あるいは、真理と教皇の不可謬性にもとづいて宣言された真理との関連よりも、あるいは、じっさい、真理とありそうもない (improbable) 真理との関連よりも、確固としているわけではない。つまり、論理的な関連はまったくないということだ。最良のベイズ主義者はこうした点をすべて承認している。そしてよき演繹主義者であるなら、演繹的関連がないところに論理的関連を発見しようとはしない。したがってかれらは、自分の信念のみで立とうとするならば、真理とは離婚しなければならないことを悟るだろう。そして離婚しているのだ。ある仮説が真であるか偽であるかは、純粋なベイズ主義者にとってもはや関心事ではない。真理の発見はもはや科学の目的でなくなる。このように真理を放棄してしまっても、なんらかの関連した目的（説明とか

問題解決といったもの)が真理の代わりにおかれるならば、耐えられるかもしれない。しかし、そうした代替案はなんら提案されていない。このように科学的探求の目的を心にかけていないということ、これがベイズ主義の立場に対する主たる異議なのだ。

適切な言い方をすれば、もちろん、ベイズ主義者は見解とか信念をもっておらず、信念の度合いをもっているだけだ。純粋ベイズ主義者が「経験からの学習と呼ぶものは……付加的情報に照らして確率値の割り当て〔分布〕を修正する過程のことである」

(Rosenkrantz *op. cit.*, 48)。この修正過程にとってカギとなる概念は条件化であるが、それが退屈なことに、多くのベイズ主義者によって帰納推理と呼ばれている。しかし、ベイズ主義的条件化には帰納的なものは、まったくもってなにもない。確率言明は外界についての言明ではないのであり、新しい証拠に照らしてそれらの言明がどう修正されていくかは、完全に演繹的に決定されている——証拠からの演繹としてではなく、現在の証拠状態からの演繹（この点で、ベイズ主義と上述の 6.3 で批判しておいた理論は類似している）として決定されているのだ。ヒュームの帰納の問題は、最小限主義的なやり方で解かれている。つまり、ベイズ主義者は、(証拠言明についてはおそらく別であろうが)科学の理論が真であるとか偽であるとは決して主張しないのであるから、そもそもそうした主張を正当化する必要はないということである。ジェフリーによれば、「理論の選択にかんするベイズ主義的あるいは、確率的理論は存在しない……」(1985, 141)。そのようなものがある必要もない。なぜなら、そもそもある科学理論を他のものよりも選択するといったことを純粋ベイズ主義者はしないからである。もちろん、ある理論は別な理論よりもよりありそうかもしれない。しかし、それで終わりなのだ。ありそうだということは、その理論をよりよい理論にするわけではない（非ベイズ主義者がよりよい理論であると呼ぶものは、その理論をよりありそうにする手助けになるかもしれないということとは考えられるかもしれないが）。

これは世界のありように関心をもつことを徹底的に拒否しているわけで、そこには疑いもなく高貴なものもあるが、そこにはまた少しばかり幽霊じみた、非現実的なものもある。そこでなされているのは、あて推量と誤りという汚く不確実な世界から、世界についての自分の信念の度合いが経験によってどう変更されていくかを高みから見つめるという、内面への方向転換なのである。〔外界について語ることは〕首尾一貫して禁欲しなければならないにもかかわらず、それに耐えられるベイズ主義者はほとんどいない。たとえば、ド・フィネッティは（いかなる確率論的なヘッジもとらずに）「われわれのすべては二〇二〇年までにベイズ主義者になるだろう」（1970/1974, 2; 予測の定式はページ ix でのリンドリーのまえがきからである）という推測を述べた。ホーソンとアーバックはある個所で「いかなる事前の確率値割り振り〔分布〕も入手可能な事実データを表現するわけではない」と言っている（*op. cit.*, 289）。これでは、どんな分布もなんらかの確率言明を表現していたかのようである。（もちろん、分布には多くのことを読み入れることも読み取ることもできる。ちょうど、お茶の葉に多くのことを読み入れることも読み取ることもできるように）。純粋ベイズ主義者は、個人が信念の度合いとして割り振る値は、まさにそうしたものでしかないということ、つまり、それらは（更新のためのベイズの定理を含めて）確率計算に適合するかぎりでは、合理的であるが、それ以上ではないということ、そして世界についての事実判断とは結びついていないことを認める用意をもつべきであろう。

こうした見解によれば、科学に目的はない。新しい情報の獲得は一般に確率分布の変更を導くが、それらにおける改善を導くわけではない。仮説をより（あるいは、より少なく）ありそうにする証拠の発見は科学における前進ではない。それはただの動きでしかない。くわえて、確証的な、あるいは、反確証的な証拠の探求が科学を特徴づけるのだと主張されるや、ベイズ主義的立場のつましい魅力もうせさ

ってしまう。そうした主張をすることは、信用を失墜した競争者ともども帰納主義の泥沼のなかにはまり込んでいくことである。

すでに述べたように、確証的な証拠、確率的支持といった帰納主義の誘惑に抵抗できるベイズ主義者はほとんどいない。ベイズ主義者にとっては、支持関数 $s(h, e)$ を $P(h|e) - P(h)$ ——これは、証拠 e の出現によって h の確率が高まる程度を示すものである——と定義する（上述の 3.3）というふつうのやり方を取り、それに認識論上のある価値をおくことが掛け値なしの標準となっている。かれらはなぜそうするのか、わたくしは戸惑うばかりである。ベイズ主義者は、帰納主義者とは考えられていないのであって、反証主義者と同じように、仮説に経験的支持が付与される際のやり方についてはほとんど関心をもつべきではないのだ。わたくしは、ポパーとミラーの定理（1983; 1987）に対するベイズ主義者の精力的な反応を見たとき仰天した。エルズ（1988）、ガイフマン（1985）、グッド（1984; 1985; 1987; 1990）、ホーソン（1989; 1990）、ホーソンおよびフランクリン（1985）、ホーソンおよびアーバック（1989, 264-67）、ジェフリー（1984）等の灼熱したコメント、要するに、これらコメントはポパーとミラーの定理についてのわれわれの解釈に抗議してあげられたすべてのベイズ主義者の声なのだ。こうした声が確実に示唆しているのはこうだ。つまり、ある種のベイズ主義者は、仮説の未検討の内容が証拠によって支持されることは可能であるべきだということ、この点をほんとうに重要視しているということである。まったくもって、わたくしにはなぜそれが重要視されるべきなのかわからない。純粋ベイズ主義者にとって、仮説が経験的に確証された（つまり、その確率が上昇した）という事実から引き出されるべき仮説の効力（*merit*）にかんしてはどんな結論もあつてはならないはずだ。その理由は、これは、高いレベルの支持もいつでも不都合な証拠によって逆転される危険のもとにあるからということではないし、あるいは、支持関数は、ある証拠と

の相関のもとで仮説のなんらかの評価された側面の測度として理解されたとき（3.3 末尾での言及を見よ）には、多数の驚くほど反直観的な性質をもつからということでもない。その理由はそんなことよりももっと基本的なことである。つまり、真のベイズ主義者であったら、仮説が支持されているかどうかに関心をもつべきではないということだ。もし関心をもつなら、かれは内密のうちに帰納主義者になったのだ。それについては、これ以上のことを言う必要はない。

ベイズ主義は全体としての科学にどんな目的も指定できないという失敗を犯している。この失敗が意味しているのは、ベイズ主義的認識論、すなわち、行為者のもつ複数の信念の度合いがどう相関しているかについての理論は存在するとはいえ、ベイズ主義的方法論といえるものはまったく存在しないということだ。ベイズ主義的フレームワークのなかに適正なかたちで住みついている明確なルールあるいは、手続きがただ一つ見出せるが、それはベイズの規則、すなわち、期待される効用を最大化せよという勧告である。ベイズ主義には、このルールを使って、なぜ科学的探求は典型的には意のままになる全証拠を考慮に入れそして（コストを考慮に入れるとはいえ）より証拠を集めようとするのか、を説明しようという試みがある。このまさに賞賛されてきた試みをわたくしは第七章で批判的に見るつもりである。わたくしの結論は、この説明はいくつかの点で不満足なものであるし、いずれにしても、ベイズのルールは合理的な意思決定のルールとしてはほとんど受け入れ難い、ということになるだろう。かりにこの結論が妥当でないとしたところで、方法論の全体がベイズのルールの適用に還元されると主張するのは絵空事であろう。じっさいには、ベイズ主義者はこうした主張はまったくしていない。かれらがしていることは、標準的な反証主義的方法論的指示事項は、確率論の言語を使って、書き直す、しかもあきらかにより正確なかたちで書き直すことができると示すことである。だが、その時、その書き直しは、真の演

繹原則を放棄しているのに、その点を少しも明示せず、当該の方法論的ルールをベイズ主義の立場から説明したもの——ふつうにはより正確な説明とされているのだが——等しいとされているのだ。しかしながら、注意深く見るならば、実際には説明など提供されていないことがわかるだろう。

たとえば、ゆるいテストよりもきびしいテストを選ぶようにというよく知られた方法論的ルールを取り上げてみよう。われわれは、きびしいテストという考えが確率論の用語に翻訳できることをよろこんで承認するだろう。テストがきびしいと言えるのは、テスト下の仮説のもとでは高度にありそうだが、背景的知识のみでは高度にありそうもない現象を探求するときであろう。（Popper 1963, 付録 2 を見よ）。計算の他方の終端で生じてくるのは（たとえば、グリュンバウムの著 1976b で述べられていたように）、きびしいテストはゆるいテストよりも、テスト下の仮説の確率を劇的に上昇させるはるかに大きな力をもつということである。言い換えると、それははるかに大きな支持を提供しうるのである。しかしながら、それはそれ自身では、きびしいテストをおこなう労を払うべきであるという指示を与えてくれない。方法論的観点から見ると、きびしいテストという学説のベイズ主義的綿密化はまったく空疎である。同じことは、ヘンペルのパラドックスについてのベイズ主義的解決についても言えるだろう。おそらくベイズ主義は、世界が今あるような姿をしているかぎり、白い靴は「すべてのカラスは黒い」に対して、黒いカラスが与えるよりも少ない支持しか与えないと示すことができるだろう（Earman 1992, 69-73）。その説明に欠けているのは、単純な経験的法則をテストするために使用されたサンプリングの技術である。同じことは、仮説はそれが示唆される以前に知られていた証拠によって支持されるかどうかという問題についての（Howson and Urbach 1989, 270-284 や他の多くの者たちによって論じられた）現在の果てしない論争にもあてはまる。ここではわたくしは双方の側に同意する。仮説は、たん

にこの仮説に即応するだけの証拠によって支持される。他方でそうした支持は、いかなる意味においても、テスト下の仮説の信用力に寄与しないということだ。しかし、この点にかんしていえば、わたくしの見るところ、それは他の仕方でも獲得された経験的支持についても言えることである。経験的証拠というものは仮説を支持するために使われるのではなく、反駁するために使われるのだ。

それ自身で非常に多くの教訓を含んでいるのだが、最後に挙げたい例は、デュエム・クワイン問題をベイズ主義の立場で解こうとするドーリング(1979)の巧みな試みである(Earman op. cit., 83-85を見よ)。論点はこうである。それのみではテスト不可能な仮説 h があるとする。しかしながら、この仮説は補助仮説 k と結合することによってテスト可能となる。テストしてみたら、この仮説は証拠 e によって反駁された。反駁されたことに責任をもつべきものは h であるよりも k であるかもしれないのだから、 h についてはなんら結論を下せないように見える。とすると、テストの眼目はなんだったのかと問われることだろう。ドーリングは、 h と k の相対的な(comparative)確率値、そしてまた e の確率に依存して、 e は h と k に対して驚くほど非対称的な効果をもつことが明らかになるかもしれないと答える。かれは次のような例を考える。 h をニュートン理論とする。 k を採用された測定方法にかんする補助仮説の集まりとする。そして証拠 e は、月の長期にわたる加速についての観測値とする。ただし、この値は、 h と k を基礎としてアダムズによって計算された値とは矛盾したとする。この例は、 h と k は確率論的に互いに独立であると仮定している。 $P(h) = 0.9$, $P(k) = 0.6$ としてみよう。三つの尤度、 $P(e/k \& \text{not-}h)$, $P(e/h \& \text{not-}k)$, $P(e/\text{not-}h \& \text{not-}k)$ は、それぞれ 0.001, 0.05, 0.05 となる。したがって $P(h|e) = 0.8976$ であるのに対し、 $P(k|e) = 0.003$ である。ニュートン理論は月の加速について報告された値によってほとんど影響されない(その確率は、わずかに 0.0024 下がるのみ

である)のに対し、補助仮説 k の傷つき方ははげしい(その確率は 0.6 から 0.003 に下がる)。わたくしは数値を生真面目に受け取ることはできないとはいえ、この結果が驚くべきものであることには同意する。ところで、こうした計算の意義として想定されているものはなんなのか。このテストは、ベイズ主義にもとづいても、仮説 k の拒絶を導くものではないだろう。というのは、ベイズ主義者は真や偽には関心をもっていないのだから、受容とか拒絶について語ることはない——そして時として、そうした話を理解しようとするかもしれないからである。そしてあきらかにこの例がなにかを証明しているというならば、それは過剰なことを証明している。なぜなら、ニュートン理論 h の確率 $P(h|e)$ を証拠 e にもとづいてほんとうに計算できるというならば、なぜ補助仮説 k が必要なのか、あるいは、必要であったのかはほとんどわからなくなる。もちろん、計算にとっての補助——一種の数学的触媒——になっていることは除くけれども。ことばを換えれば、ベイズ主義的分析は成熟した科学がもつまたく論争の余地のない性格——仮説を世界と面と向かわせるために補助仮説を採用するという性格——を説明するにあたって路頭に迷ってしまうのだ。

次章では、科学における先鋭な経験的探求の行使という問題、および、ベイズ主義はそれをベイズのルール適用として説明できるのかという問題を考察することにしよう。そして第八章では、科学的客観性を的確に述べているというベイズ主義の主張についてなにほどか語るつもりである。つまり、ベイズ主義の方法論的無効さのみならず、それが科学の実際の正しい記述に失敗していることにもきびしい目を向けるつもりである。しかし、主たる論点は、一度ならず、すでに明らかにしておいた。ベイズ主義は科学の活動からその真の目的を奪い取り、人間の知識についての研究を、それらがどのように変えられるべきかというよりは、信念がどう変わっていくかの研究に縮小してしまう。しかもそれらすべてが演繹主義の名のもとになされているのだ。

テクニカル・ノート

6.4 における後ろから四番目のパラグラフは、より形式的には以下のように述べることができよう。

P はマスグレーブの知識の獲得にかかわる帰納原理、つまり「きびしい批判的吟味を生き延びた理論を受け入れることは合理的である」である。 H はなんらかの理論であり、 e は H がきびしい批判的吟味にさらされ、そしてそれを生き延びたという（真であることがわかっていると想定してよい）報告である。 A は「[$\sim$ を] 受け入れることは合理的である」の略記的表現である。 A -移転の原理（ここでは問題にしないでおく）は、もし $A H$ で、かつ H が h を含意するならば、 $A h$ であると述べるものである。
導出

P, e であるゆえに AH (1)

は、演繹的に妥当である。もし P が真であるならば、もちろん AH も真である。しかし、 P は、受け入れることがおそらく合理的であるとはいえ、真であるかはわからない。 A -移転の原理によれば、もし AP であるならば、 AAH である。よって AAH 。しかし、一般的に言って、(1) によって—— AP という仮定と一緒にしてだが——おそらくはマスグレーブが欲しているような結論、つまり、 AH を結論することはできない。

さて、 e^* は P がきびしい批判的吟味にさらされ、そしてそれを生き延びたという（真であることが知られていると想定しうる）報告であるとしよう。導出

P, e^* であるゆえに AP (2)

は、演繹的に妥当である。もし P が真であるなら

ば、もちろん AP も真である。しかし、 P は、受け入れることがおそらく合理的であるとはいえ、真とはわかっていない。 A -移転の原理によれば、もし AP であるならば、 AAH である。よって AAH 。導出(2) が産出するのはこれだけである。もちろん、もし AP であるならば、 $A P$ であると結論することはできるが、そのためにもっとも些末な論理以上のものに訴える必要はないわけだ。無限後退が姿を現しているのは明白である。思うに、それが悪しき後退であることも明白であろう。系列の要素、…… $AA P, A P, P$ はどんどん後ろに下がっていく。出発点と考え得るようなものは存在しない。

「もし AAH であるならば、 AH である」という図式に K という名前を与えておこう。 K が真であるならば、(1) によって、もし AP であるならば、 AH である。しかし、 K は、分析的でないとしたら、真であるかはわからない。おそらくそれを受け入れることは合理的ではあるだろうが。 A -移転の原理によって、もし AK であるならば、 $A(AP$ ならば $AH)$ である。もし $A(H$ ならば $K)$ かつ AH ならば AK であるという原理をみとめたところで、これから絞り出せるのは、もし AAH であるならば AAH である、ということではしかない。 K が真であるという（マスグレーブの目で見ても正当化されていないし合理的でもない、とわたくしは考えておくべきだったということである）仮定がなければ、重複する AA を追放するものはなにもない。

<訂正>

拙訳『批判的合理主義：再定式と擁護』、第5章 ヒューム：ベーコン＝ゲーデル：ヒルベルト」（本誌、2014年、vol.6, no. 1, p.71）の右コラムにおいて（1095 /1967, 135, Principle I）は、(1905 /1967, 135, Principle I) の誤りでした。お詫びして訂正させていただきます。



<書評>

Rafe Champion, *Review of Kei Yoshida, Rationality and Cultural Interpretivism: A Critical Assessment of Failed Solutions*. Lexington Books, London, 2014.

This is an important and challenging book because the author seriously engaged with two bodies of literature that are rarely treated between the same covers. These are the literature of anthropology and cultural studies and the literature of critical rationalism. The author is a critical rationalist and the purpose of the book is “to critique cultural interpretivism by scrutinizing five different advocates of it and their solution to the problem of rationality” (p. 3).

Yoshida identified two major limitations in the treatment of these issues by the majority of philosophers who venture into this field. The first is the failure to come to grips with the substantive theories that are in play in the social sciences. Partly under the influence of “ordinary language” philosophy the commentators are often “content free” and they do not enter into the “game” of social science. Instead of playing the game they offer advice from the philosophical “stands” outside the court where the game occurs. The author noted “they ignore social scientific research” (4).

The second major shortcoming is the general acceptance of positivism as the appropriate method for the natural sciences. It is not generally appreciated that Popper and critical rationalism offer a robust and radical alternative to positivism and its successors in the philosophy

of science. The result is that the cultural interpretivists maintain the reputation of positivism in the natural sciences and people educated in the humanities have a false conception of the methods of the natural sciences.

Most of the book consists of critical commentaries on the work of Peter Winch, Charles Taylor, Clifford Geertz, Marshall Sahlins and Gananath Obeyesekere and their contribution to the rationality debate which became a central issue in the philosophy of the social sciences since the 1960s. All five insist that the social sciences cannot be approached in the same manner as the natural sciences and two of them question whether the social sciences can properly be called sciences at all. For Taylor the guiding principles of the social sciences are essentially ideological and for Geertz the work of cultural studies calls for methods of literary criticism.

Yoshida’s major criticism is that the authors have not engaged with critical rationalism and the Popperian philosophy of science, so they are unable to go beyond beating the “dead horse” of conventional positivism. As to rationality, some of the authors such as Winch operate with multiple models of rationality – the rationality of the magician and the rain dancer and the scientist for example. But the element of genuine criticism is left out and Yoshida shows how the authors tend to fall into relativism, even while denying it. Due to the failure of these authors and their colleagues to engage with the literature of Popper and the critical rationalists both the philosophy of science and the philosophy of rationality remain

under-developed in the mainstream of the social science and human studies.

In the final chapters of the book Yoshida advanced the discussion in an exciting and novel manner with a commentary on the distinction between nature and convention and the unintended consequences of human actions. He noted the contribution of the thinkers of the Scottish enlightenment (Smith, Hume, Ferguson) and the way that Hayek developed the same theme in the twentieth century. He developed four themes, first the ancient Greek distinction between nature and convention; second the treatment of unintended consequences of human actions by the American sociologist Robert Merton (1910-2003); third the methodological complications that arise from self-fulfilling and self-destructing prophecies (reflexivity in social systems) and finally he made a case for the unity of method (rather than the unity of science) with Popper's situational analysis as the key feature of the social sciences.

Yoshida explains how the literature of unintended consequences demonstrates the existence of a third category of phenomena in addition to those which are clearly "natural" and those that are created by deliberate human design. The ambiguous status of these "third category" objects caused a deal of confusion until authors such as Hayek (following the earlier Scottish and Austrian pioneers) elaborated the distinction. Yoshida argued that the aim of the social sciences is to explain this particular category of phenomena, and he further suggested that Popperian situational analysis is the way to proceed in this venture.

He recreated Popper's example of "Richard crossing the road" to explain situational analysis

(Popper 1994). One of the features of the model that needs to be mentioned is the notion of "plastic control" that Popper introduced in his paper "Of Clouds and Clocks: An Approach to the Problem of Rationality and the Freedom of Man" (Popper, 1972). Among the obstacles that Richard has to negotiate on his journey across the street there are physical objects such as cars and there are other barriers that are not material but social such as traffic rules. Popper proposed to use the name "social institutions" for non-physical things which influence human actions almost as if they are physical obstacles. Some of those things are set down in the traffic laws and others are informal (like local conventions regarding the formation of an orderly line when waiting for service). In each case the control that these non-physical barriers exert is plastic, they permit a wide range of responses from people, even people who are aware of them. The plasticity of this kind of control is especially apparent in the case of visitors from other countries or cultures where their local rules and conventions are not the same as ours.

Perhaps the next step that is required to advance the critical rationalist project in this area is to apply situational analysis to larger and more theoretically interesting problems than Richard crossing the road. Magee provided an example from international relations in his book *Confessions of a Philosopher* and other issues calling for this treatment are the debt, economic stagnation and over-regulation by bureaucracies in many of the western nations, notably in the European Union. On a smaller scale there is the relatively recent (postwar) evolution of the universities into organizations driven run by administrators rather than the academic staff.

The author concluded that cultural interpretivism should be seen as a misguided attempt to save the social sciences from the inferiority complex that is often called “physics envy”. It is misguided because it is based on a false, pre-Popperian perception of the method that is appropriate for the natural sciences. Consequently the critique of positivism by the interpretivists does not challenge the validity of positivism in the natural sciences and that mistaken view of scientific method persists among scholars in the humanities. Another result of that mistaken view is that the differences between the natural and social sciences are exaggerated, especially with regard to the degree of reliability (or probability) of knowledge in the natural sciences. The conjectural nature of scientific knowledge is not fully appreciated and the importance of the critical approach in science is often neglected in the education of scientists and engineers.

In conclusion, this book deserves a wide readership across the full range of the social

sciences, humanities, philosophy and methodology in the human sciences. Interpretivists should appreciate the effort that the author has made to come to grips with their literature and it is to be hoped that they will be receptive to the Popperian (critical rationalist) criticism of positivism in the natural sciences.

This is a remarkable work of scholarship and it is not surprising that it took many years to write. Yoshida generously acknowledges some 30 named helpers, headed by Ian Jarvie.

References

- Brian Magee, 1997. *Confessions of a Philosopher*, Weidenfeld & Nicolson.
- Karl Popper, 1973. “Of Clouds and Clocks: An Approach to the Problem of Rationality and the Freedom of Man”, in *Objective Knowledge*, OUP.
- Karl Popper, 1994. “Models, Instruments and Truth: The Status of the Rationality Principle in the Social Sciences”, in *The Myth of the Framework: In Defence of Science and Rationality*, ed. M. A. Notturmo, Routledge.

☆☆

日本ポパー哲学研究会 2014 年度会員総会議題

2014. 8. 2 (土)

於:慶應義塾大学三田キャンパス研究室棟 1 階 A 会議室

I. 2013 年度活動報告

- ・第 24 回年次研究大会 於: 日本大学文理学部キャンパス 3 号館 3505 教室

発表①村中 達矢 (金沢大学客員研究員)

「仮説の反証を利用して新知識を容易に獲得することができるのはどのようなときか: C.S.パースの理論に着目して」

発表②篠崎 研二 (昭和電工 研究開発部マネジャー)

「歴史科学方法論という幻想」

発表③小河原 誠

「汎批判的合理主義について」

- ・機関紙『批判的合理主義研究』Vol.5, No.1, No.2 発行。

II. 入退会者、住所変更

- ・退会者 1 名 ・住所変更

藤重栄一 高木健治郎 新住所 〒420-0882 静岡市葵区安東 1-1-20
井上一夫 (逝去) 山根 正気 日置郡松元町春山字姫ヶ迫 1054-1

III. 運営委員の改選および会長・事務局について

- ・運営委員案: 以下の(16)名

蔭山泰之、笠松幸一、小河原誠、小柳昌司、坂本百大、篠崎研二、嶋津格、施光恒、立花希一、
丹沢安治、徳丸夏歌、戸田裕美子、冨塚嘉一、堀越比呂志、渡部直樹

- ・運営委員決定後、代表・事務局案<資料2>を発表。

IV. 決算報告

<資料 1> 参照

V. 来年度年次研究大会について

VI. その他

- ・ホームページについて

<資料1>

◆2013 年度会計報告(2013.4.1－2014.3.31)

収 入	金 額	支 出	金 額
前 期 繰 越 金	241,347	会費振替手数料等	4,040
会費収入	133,000	第 24 回年次大会関係(日大)	
第 24 回年次大会懇親会収入	70,000	懇親会費	100,000
		アルバイト代(3 名)	15,000
		年会費請求書郵送費	4,560
		次 期 繰 越 金	320,747
計	444,347	計	444,347

以上の通り報告致します。 2012 年 7 月 7 日 事務局 会計担当 富塚嘉一(中央大学)

監 事 渡部直樹(慶應義塾大学)

<資料2>

会長・事務局案

会長⇒嶋津

事務局

組織・会計部(入退会・名簿変更窓口、会費徴収・会計管理)⇒富塚、井上

大会運営部(大会テーマ企画、案内、開催)⇒渡部、堀越

機関誌編集部(原稿依頼、編集、印刷、発送)⇒小河原、立花

ウェブ編集部(ホームページ管理)⇒蔭山

☆☆

日本ポパー哲学研究会 第 25 回年次大会 会員総会 2014.8.2 於 慶應義塾大学

◆2013 年度会計報告(2013.4.1－2014.3.31)

収 入	金 額	支 出	金 額
前 期 繰 越 金	241,347	会費振替手数料等	4,040
会費収入	133,000	第 24 回年次大会関係(日大)	
第 24 回年次大会懇親会収入	70,000	懇親会費	100,000
		アルバイト代(3 名)	15,000
		年会費請求書郵送費	4,560
		次 期 繰 越 金	320,747
計	444,347	計	444,347

以上の通り報告致します。 2014 年 8 月 2 日 事務局 会計担当 冨塚嘉一(中央大学)
監 事 渡部直樹(慶應義塾大学)

編集後記

今回初めて編集を担当させていただきました。これまでにはいつもできあがった機関誌をいただいているだけだったので、編集の苦勞がわかっていなかったのですが、実際に自分でやってみるとありがたさが身に沁みます。といっても、今回は小河原先生に全面的に協力していただいているので、本当に自分で全部編集したわけではないのですが…。

研究会の HP がリニューアルを経て、非常に充実してきています。特に、新着情報は最近のポパーの研究を知る上でとても有益だと思います。会員の皆さまのご協力によりよい HP ができることを願っています。また機関誌への投稿論文も随時募集しておりますので、よろしくお願いいたします。(文責：小柳 昌司)

電子ファイルの送付について

機関誌は電子ファイルのみの作成となります。PDF ファイルを開くためのパスワードは、Popper2014 です。ファイルは、高解像度での印刷のみを許可し、他の操作は禁止されています。これを解除するための権限パスワードは winter です。「アドバンスト」から「セキュリティ」へと進み、「この文書からセキュリティ設定を解除」によって解除してください。

本号についてのご意見等につきましては、編集委員（現在は、小柳 昌司 koyanagisj@gmail.com）までご連絡いただければ幸いです。

批判的合理主義研究（通巻 12 号）

2015 年 1 月発行

本誌は、『ポパーレター』（1989～2008,
通巻 38 号）を改題し、継承したものです。

発行人 小柳 昌司

編集・発行 日本ポパー哲学研究会事務局
機関誌編集部

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
140 番地ポルト・ド・岡崎 1 階 ギャラリー・
フクミシムラ気付

Tel. 090-3842-9002

Email: koyanagisj@gmail.com

入退会・名簿変更、会費徴収・会計管理に
関しては、「日本ポパー哲学研究会事務局組
織・会計部」にお願いいたします。

〒162-8473 新宿区市谷田町 1-18 中央
大学大学院国際会計研究科富塚研究室 1402
号

Tel. 03 (3513) 0415

Fax. 03-3513-0319

Email: h00370@tamacc.chuo-u.ac.jp